



序 文

大山町は、日田市の真ん中辺りに位置し、その町域のやや東寄りに九州最大の河川、筑後川の上流部、大山川が流れています。

大山川は、小さな屈曲を繰り返しながら、町内を南から北に向かって流れ、その浸食作用によって長い時間をかけ、深い谷や河岸段丘を形成してきました。谷の底部には、細長い沖積地がつくられ、その沖積地上には今なお多くの集落がみられます。

本書で報告いたします中川原遺跡は、そんな大山川沿いの沖積面に形成された遺跡です。

平成18年に実施しました発掘調査では、先史・古代の人々が残した遺構や遺物が数多く確認され、当時の生活や文化を考える上で大変有効な情報を私たちにもたらしてくれています。

今回は、この情報を少しでも早く皆様方に公開したいとの思いから、その概要を報告させて頂きます。

本書の刊行により、この中川原遺跡が多くの方々に認知され、それとともに本書が、いにしえの大山町を垣間見る史料として大いに活用して頂ければ幸いです。

おわりになりますが、発掘調査から本書の作成に至るまで、御指導・御助言・御協力を頂きました多くの方々に対し、心から感謝申し上げます。

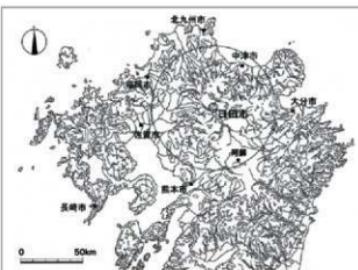
平成22年 3月

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

目 次

Iはじめに	1
II調査に至る経過と組織	4
III遺跡の立地と環境	10
IV調査の内容	13
V自然科学分析	23
VI小結	40
付編1縄文住居を掘る	42
付編2中川原遺跡の植物遺体から みた縄文時代の植物利用	46
あとがき	48



日田市の位置

例 言

- 本書は、県営中山間地域総合整備事業大山地区老松工区の実施に伴い、埋蔵文化財調査を行った中川原遺跡2次調査地の発掘調査概要報告書である。
- 調査は、大分県日田地方振興局（現大分県西部振興局）の委託を受け、日田市教育委員会が実施した。
- 調査にあたっては、老松水利組合 江藤剛組合長をはじめ、地元の方々、市大山振興局産業課のご協力を得た。
- 本書に使用した発掘調査時の写真は、主として今田が撮影したものである。
- 本書で使用した空中写真是、九州航空株式会社に委託し撮影したものである。
- 本書で使用した遺物写真是、国際文化財株式会社大分営業所に委託し撮影したものである。
- 石材の同定に関しては、理学博士である野田雅之氏（大分地質学会会長）にご教授を得た。
- 自然科学分析に関しては、株式会社パレオ・ラボに委託し、その結果については本書に掲載した。なお、各分析担当者については、それぞれ文末に名前を記した。
- 本書の執筆は、日若杉か行い、付編2は佐々木由香氏に依頼し、原稿を頂いた。その他、Vの自然科学分析除いては今田が行った。
- 本書の編集は、今田が行った。
- 出土遺物及び調査に関する記録等は、一括して日田市教育委員会が保管している。
- 最後に本書を刊行するにあたり発掘調査中及び整理・報告書作成段階において、調査指導の先生方以外に次の方々からご指導・ご助言・ご協力等を頂きました。記して感謝申し上げます。

下村智 後藤一重 前追亮一 坪根伸也

林潤也 中尾篤志 松本茂 森先一貴

佐々木由香 有馬飼子 敦賀啓一郎

芝康次郎 金丸武司 白木守 熊代昌之

池田朋生 植原出男

I はじめに 一大山町における考古学的調査

日田市は、北部九州のほぼ中央、大分県の西部に位置し、福岡県と熊本県に隣接する。また、周囲を阿蘇・くじゅう山系や英彦山系の美しい山々に囲まれており、これらの山系から流れ出る豊富な水は九州最大の河川、筑後川となる。それら日田盆地で合流した水は、筑後・佐賀平野を貫流しながら、有明海へ流れ込む。

筑後川の上流部、大山川が、町域の東寄りを南北に縱貫する大山町は、平成17年3月22日に、同じ日田郡の天瀬町・前津江村・中津江村・上津江村とともに日田市に合併している。

大山町域では、現在13箇所の埋蔵文化財包蔵地が把握され、またそのうちのいくつかには考古学的な調査が行われている。

大山町内での初めての本格的な発掘調査としては、昭和45年10月に関西大学下笠・松原ダム総合学術調査団が行った貫見遺跡の調査が挙げられる。

貫見遺跡は縄文時代を中心とする遺跡であり、こ

の調査では、早期の押型文土器や前期の轟B式土器のほか、石器などの多くの石器や土器片鱗などの遺物や住居跡の柱穴ではないかとみられる遺構などが確認されている。⁽¹⁾

その後、昭和49・50年には、大山町教育委員会により、2件の発掘調査が実施されている。

昭和49年の塚の本遺跡の調査は、工場増築のための基礎工事に伴い行われたもので、弥生時代中期の土器等の多量の遺物が出土し、満と思われる遺構が検出されている。⁽²⁾



塚の本遺跡発掘調査風景（昭和49年）



貫見遺跡発掘作業風景（昭和45年）



塚の本遺跡発掘作業風景（昭和49年）

昭和50年には、大山小学校校庭遺跡で、校庭内の排水工事に伴い、弥生時代後期とみられる2基の箱式石棺墓の調査が行われている。⁽³⁾

その後、大山町では、30年近くの長い間、本格的な発掘調査が行われる機会が無かった。

大山町が合併により日田市となった平成17年、再び大山小学校で、グラウンドの排水設備の設置工事が行われることとなり、その工事に伴い、日田市教育委員会が10~12月にかけて中川原遺跡⁽⁴⁾の

発掘調査を実施した。この調査では、弥生時代後期とみられる竪穴住居跡や石棺墓・木棺墓・土坑墓、そして中世の土坑墓が確認された。中世墓からは人骨とともにガラス製の念珠が出土している。⁽⁵⁾

今回、その概要を報告する中川原遺跡は、平成18年3~11月に圃場整備事業に伴い、日田市教育委員会が調査を実施したものであり、調査面積・遺跡の内容とともに、今までに大山町域で行われた調査の中では、群を抜くものである。



中川原遺跡遺構（平成17年調査地）

写真右が大山川。左手の大きな建物が大山小学校。
その間、写真手前のグラウンドが調査地。



中川原遺跡の中世墓

この墓からは、人骨とともに、
ガラス製の念珠が出土した。
人骨は、いわゆる「頭北西面」
の体勢をとっていた。

▼中世墓発掘風景



大山小学校

児童見学風景▶

小学生らの目の前
にあるのが、弥生
時代後期の竪穴住
居跡。

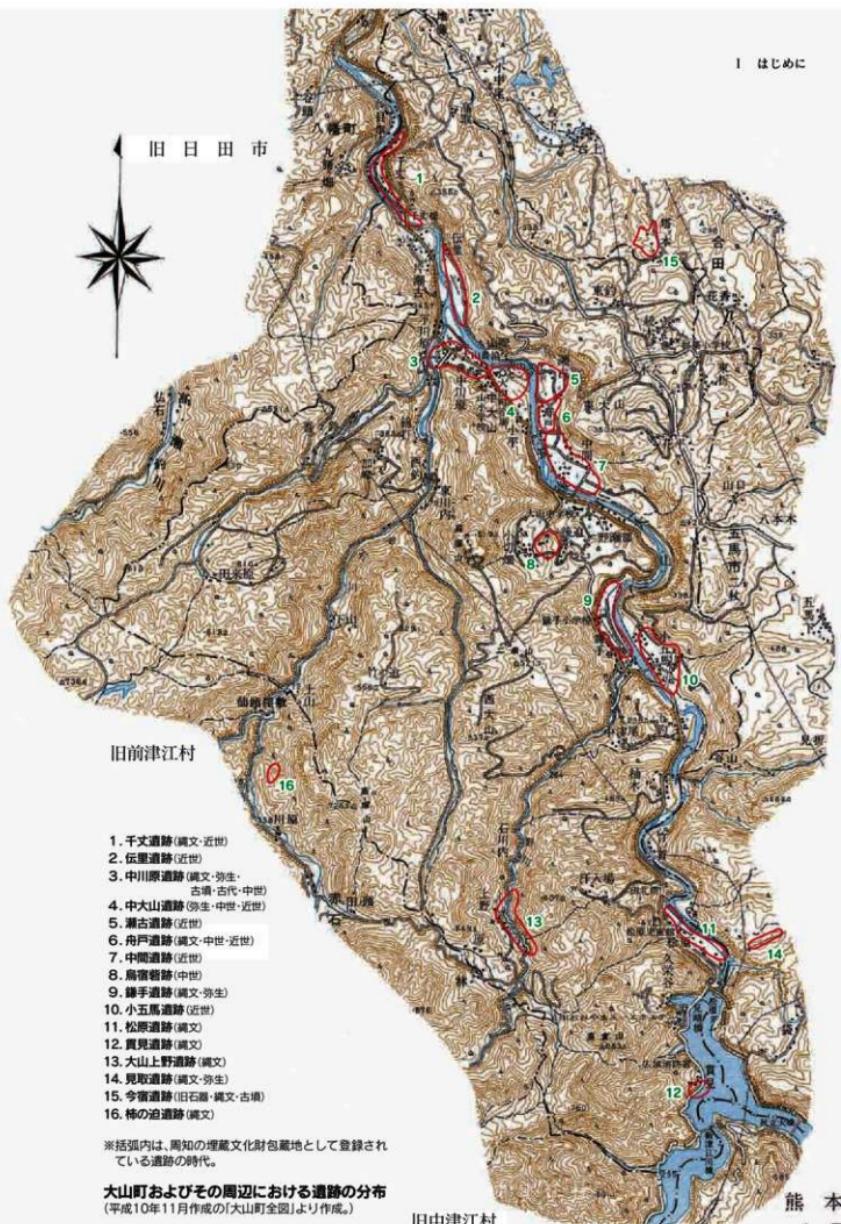


【註】

- (1) ここで記した内容は「日で見る記録 昭和45年10月実施 貢見郷文化遺跡の発掘調査実績写真集 大山町中央公民館」から窺えるものである。当時の詳細な調査内容・結果については、いずれ調べていただきたい。
- (2) ここで記した内容は『私の本道跡一作 昭和49年9月28日発見 昭和49年10月28日 大山町教育委員会』の記録および文献1を参考。
- (3) 文献1・2を参考。
なお、この時発見された石棺墓のうち1基は、天領奥日田やすらぎの郷の大山町のふるさと資料館にて復元・展示している。
- (4) 市町村合併後の平成17年6月に、天瀬町以外の大山町を含む旧日田郡1町3村の埋蔵文化財包蔵地の整理を行った際、大山小学校校庭遺跡は他の本道跡を含めて包蔵地の範囲変更を行い、中川原遺跡として認められた。
- (5) 文獻3参照。

【参考文献】

1. 後藤宗俊 1995 「第二編 第一章 先史・原史」「大山町誌 虹を追って」 大山町
2. 渡辺忠章 1977 「44-17 大山小学校校庭跡」『日本考古学年報28(1975年版)』 日本考古学協会
3. 行持桂子 2006 「中川原遺跡」日田市教育委員会
4. 今田秀樹 2007 「4. 中川原遺跡2次」平成17年度(2005年度) 日田市埋蔵文化財半報 日田市教育委員会
5. 今田秀樹 2008 「2. 中川原遺跡2次」平成18年度(2005年度) 日田市教育委員会



II 調査に至る経過と組織

調査に至るまでの経過

県営中山間地域総合整備事業は、中山間地域の立地条件にあった農業の展開方向を探り、ほ場整備や農業用排水施設整備、農道整備などの生産基盤・環境整備等を総合的に行い、農業・農村の活性化を図ることにより、定住の促進・都市との共通社会基盤の形成及び国土・環境の保全に資することを目的とした事業であり、日田盆地の南に位置する大山地区を対象とした事業は、平成17~20年度予定で計画された。

まず、平成16年度中に行った県文化課や大分県日田地方振興局（現大分県西部振興局、以下県振興局）、旧大山町役場（平成17年3月に日田市と合併）との協議を経て、平成17年11月10日付けで大山川左岸に位置する、同地区老松工区（事業対象面積約3ha）における予備調査の依頼文が県振興局長名で提出された。これを受けて、市教育文化財保護課では、事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である中川原遺跡に該当、遺跡が存在する可能性が高いと判断し、予備調査を実施する旨を回答した。

予備調査は、平成17年12月20日～平成18年1月11日の間に実施した。調査では事業予定地内に14



▲予備調査風景
(平成17年度)



本のトレンチを設定し、重機と作業員により埋蔵文化財の有無の確認を行った。その結果、事業予定地の南東側に設定した7本のトレンチから、縄文時代～古墳時代に至る遺物や堅穴住居跡、土坑、溝などが確認された。

なお、この予備調査の実施中にも事業主管部署である耕地課（現農林基盤部）と協議を行い、工法上切り土となる部分約3,000m²については調査対象となる可能性が高いこと、換地・設計終了後に調査着手できるよう契約準備をすること、耕作土除去は工事側で行うことなどを確認した。その後、予備調査の結果を受けて、調査対象となる面積が6,160m²となり、調査着手への準備を進めていたが、諸事情により、調査の開始に大幅な遅れが生じた。

結果的に発掘調査は、切り土となり、遺構を損なうことか確実な部分のうち、調査のための進入の許可の下りた箇所のみを3月13日に先行して着手し、表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘下げの一部を行い、同29日に平成17年度の調査は終了した。



平成17年度 発掘作業風景

平成18年度からは、全ての調査対象地に進入可能となり、5月22日より調査に着手した。しかし、



発掘作業風景
重機による表土除去作業。



発掘作業風景
道構等検出作業

道構検出作業を進めていくと、予備調査の実施が出来なかつた箇所から、数多くの道構が確認され、予想を超える道構密度となつた。このような状況から、道構すべてを完掘すれば、期間内での調査終了は困難、さらに工事にも影響が出ると判断し、盛土部分は一部確認にとどめ、完掘しない方針とした。その後、8月中旬には道構検出が終了し、正確な検出面

の標高が出了ことから、盛土によって保護される範囲が確定した。これにより、対象面積6,160m²のうち、4,060m²が盛土対象となった。また盛土部分における調査終了後の埋め戻しについては農林基盤側と協議し、遺跡の適正な保護のために文化財側で行うことになった。



発掘作業風景
堅穴住居跡掘り下げ作業。



発掘調査地埋め戻し風景
道路を保護することが決まった範囲には、道構を傷つけないように慎重に土を盛った。



発掘調査風景
道構等実測作業。



埋め戻し完了後風景
調査範囲の約3分の2には、多くの道構や遺物等が遺されていたが、盛土によりその保存が図られた。

II 調査に至る経過と組織

発掘調査は11月10日に終了、11月15日に日田警察署長あてに埋蔵文化財観見届を提出し、平成20年3月12日に埋蔵文化財の認定を受けた。

出土遺物▶
近年、日田市が行つた
発掘調査では、一番多く
の遺物が出土した。



また、調査の経過は以下のとおりである。

- 3月13日 機械による表土剥ぎ開始
- 3月21日 道構検出開始
- 3月24日 道構掘り下げ開始
- 3月29日 平成17年度の調査終了
- 5月24日 表土剥ぎ再開
- 6月 5日 作業員による作業開始
- 7月 5日 基準点測量実施
- 7月22日 地形測量開始
- 8月10日 熊本大学 木下尚子教授 現地指導
- 8月24日 別府大学 金田信子講師 現地指導



◀木下尚子先生
指導風景▶



金田信子先生
指導風景▶



◀後藤宗俊先生
指導風景▶

- 9月 4日 別府大学 下村智賀教授 来訪
- 9月14日 杵築市教育委員会 吉田和彦氏 来訪
玖珠町教育委員会 佐藤祐二氏 来訪

9月22日 道構実測開始

- 10月 4日 大分県教育庁
- 文化課 後藤一重氏 来訪
- 文化課 恒賀健太郎氏 来訪
- 10月 5日 大山小学校2年生窪穴住居跡見学
- 別府大学 玉川剛司講師 来訪
- 別府大学院生 豊田沙和美氏 来訪
- 別府大学学生 須村哲也氏 来訪



発掘中の窪穴住居跡を見学している
大山小学校2年生

- 10月14日 空中写真撮影実施
- 大野城市教育委員会 林潤也氏 来訪
- 福岡県教育委員会 林知恵氏 来訪

- 10月16日 豊後大野市教育委員会
- 後藤幹彦氏 来訪

- 10月19日 北九州市立自然史・歴史博物館
- 敦賀啓一郎氏 来訪

- 10月20日 別府大学 後藤宗俊教授 現地指導



掘り下げ途中の縄文時代の住居跡
を前に立つ下村智賀先生



穴場周辺の縄文時代の住居跡

- 10月22日 鹿児島県教育委員会 前追亮一氏 来訪
大分市教育委員会 浜根伸也氏 来訪
- 10月28日 長崎県教育委員会 中尾篤志氏 来訪
- 11月 1日 盛土保存部分の埋め戻し開始
- 11月 6日 造構掘下げ終了
- 11月10日 器材撤収を行い、調査終了



調査風景

なお、整理作業は平成19年1月30・31日、平成19年5月1日～平成20年2月29日、平成20年5月7日～11月28日、平成21年5月7日～平成21年12月28日の間に実施、遺物実測・製図、造構製図、自然科学分析などの報告書作成に係る業務は平成18～21年度にかけて実施した。

また、以下に平成17年度以降の契約の内容と期間を記す。なお、いずれの年度も調査主体は、日田市教育委員会である。

平成17年度 発掘調査業務

(平成18年3月1日～平成18年3月29日)

平成18年度 発掘調査・整理作業業務

(平成18年4月24日～平成19年2月28日)

平成19年度 整理作業・報告書作成業務

(平成19年5月1日～平成20年3月20日)

※この年度の終わりに、事業最終年度が平成21年度に延長することになる。

平成20年度 整理作業・報告書作成業務

(平成20年5月7日～平成21年3月27日)

平成21年度 整理作業・報告書作成・印刷業務

(平成21年5月1日～平成22年3月25日)

調査の組織

調査関係者は以下のとおりである。

(なお、職名・氏名は当時のままとしている)

平成17年度（2005） 発掘調査

調査責任者

日田市教育委員会 教育長 謙山 康雄

調査統括

日田市教育庁 文化財保護課長 後藤 清

調査事務

課長補佐兼埋蔵文化財係長 高倉 隆人

専門員 伊藤 京子

主任 若杉 竜太

主事補 中村 邦宏

調査担当

主任 今田 秀樹

調査員

副主幹 土居 和幸

主任 行時 桂子

若杉 竜太

渡邊 隆行

主事補 矢羽田幸宏

発掘作業員

池田満夫 河津日美子 江田親 五反田静子

後藤美知夫 財津利枝 財津由太 筒井英治

原口利平 平原知義

平成18年度（2006） 発掘調査・整理作業

調査責任者

日田市教育委員会 教育長 謙山 康雄

調査統括

日田市教育庁 文化財保護課長 後藤 清

調査指導者

別府大学教授 後藤 宗俊

熊本大学教授 木下 尚子

別府大学非常勤講師 金田 信子

調査事務

課長補佐兼埋蔵文化財係長 高倉 隆人

専門員 田中 正勝

伊藤 京子

主任 若杉 竜太

主事補 中村 邦宏

調査・整理担当

主任 今田 秀樹

調査員 行時 桂子

主任 若杉 竜太

渡邊 隆行

主任 矢羽田 幸宏

主事

調査補助員 杉野貴幸 中川照美

発掘作業員

足立米子 池田満夫 石谷アサカ

石松ナミ子 江藤キミ子 小野スマ

柿本あけみ 河津定雄 河津日美子

河津モリ 河津静子 河津松子 北澤幾子

黒川舞 江田親 五島創代 五反田静子

後藤美知夫 財津鶴子 財津利枝 財津由太

高倉美利 高村三郎 谷口芳枝 筒井英治

中島カズ子 原口勝利 原田強 平原知義

藤本勢八 松間牧子 本松シヅエ 森輝雄

森本綴 矢野洋子

整理作業員

安元百合 石松裕美 銀治谷節子 平川優子



発掘風景



▲
整理作業風景
(平成18年度)



▲
整理作業風景
(平成19年度)

平成19年度 (2007) 整理作業・報告書作成

調査責任者

日田市教育委員会 教育長 謙山 康雄

(～平成19年8月17日) 合原多賀雄

(平成19年9月27日～)

調査統括

日田市教育庁 文化財保護課長 榎原 孝史

(～平成19年9月30日) 原田 文利

(平成19年10月1日～)

調査事務

課長補佐兼埋蔵文化財係長 井上正一郎

専門員 田中 正勝

伊藤 京子

主任 塚原 美保

若杉 竜太

整理担当

主任 今田 秀樹

調査員 行時 桂子

主任 若杉 竜太

調査員 渡邊 隆行

主任 矢羽田 幸宏

主事

整理作業員 銀治谷節子 石松裕美 伊藤一美 平川優子

主事

整理作業員 石松裕美 伊藤一美 平川優子



整理作業風景 (平成19年度)

平成20年度 (2008) 整理作業・報告書作成

調査責任者

日田市教育委員会 教育長 合原多賀雄

調査統括

日田市教育庁 文化財保護課長 原田 文利

調査事務

課長補佐兼埋蔵文化財係長 井上正一郎

専門員 田中 正勝

主任 塚原 美保

若杉 竜太

整理担当

主任 今田 秀樹

調査員 行時 桂子

主任 若杉 竜太

調査員 渡邊 隆行

主任

主事 矢羽田幸宏
整理作業員
観治谷節子 石松裕美 伊藤一美 平川優子



▲整理作業風景（平成20年度）

平成21年度（2009） 整理作業・報告書作成・
概要報告書印刷

調査責任者 日田市教育委員会 教育長 合原多賀雄
調査統括 日田市教育庁 文化財保護課長 原田 文利
調査事務 主幹兼理蔵文化財係長 北村 羊
専門員 河津 美広
主査 球原 美保
主任 若杉 竜太
整理・報告担当 整理・報告担当 今田 秀樹
主査 行時 桂子
調査員 主査 若杉 竜太
主任 渡邊 隆行
主任 矢羽田幸宏
整理作業員 整理作業員

観治谷節子 石松裕美 伊藤一美 平川優子



整理作業風景（平成21年度）



埋蔵文化財発掘調査情報にて公開

平成19年5月25日～6月29日の間、埋蔵文化財センターの展示室にて、中川原遺跡の調査成果をいち早く公開するため遺物や写真パネルの展示を行った。

期間中、市内外より453人の見学者が訪れた。

III 遺跡の立地と環境

本書で報告する中川原遺跡2次調査地は、大分県日田市大山町西大山字大ヶ峰に所在する。

日田市は大分県の西部にあって、九州全体でみると北に偏った中央内陸部に位置しており、行政区では東に玖珠郡玖珠町及び熊本県阿蘇郡小国町、同南小国町と、北には中津市及び福岡県田川郡添田町と、西に福岡県うきは市及び同朝倉市、同朝倉郡東峰村、同八女郡星野村、同矢部村と、南に熊本県阿蘇市及び同山鹿市、同菊池市と、6市4町2村と境を接している。

大山町は、日田市域の中央辺りに位置し、町域の東寄りに、筑後川の上流、大山川が南北に大きく貫流している。



調査地位置図 (1/25,000) ※赤色部分が調査地。



空中写真 (南西より遺跡を望む)

写真の中央を横走しているのが筑後川の上流、大山川。写真手前側から大山川に斜めに注ぎ込んでいる川が赤石川。(黄色圈み部分が調査地)

大山川の本流には、赤石川などの大小の支流と小さな谷川が流れ込んでいる。大山町の地形の特徴としては、これら河川の堆積作用によりつくられる沖積地が少ないこと、浸食作用によって川の両岸に形成される急傾斜地や断崖状となつた地形が多いこと、その上に広がる台地状の平坦な地形が挙げられる。

中川原遺跡は、大山町の北部、大山川左岸の沖積面に位置している。なお、遺跡地の下流側にて、前津江町の赤石・大野地域から流れ出る赤石川が、大山川本流と合流する。

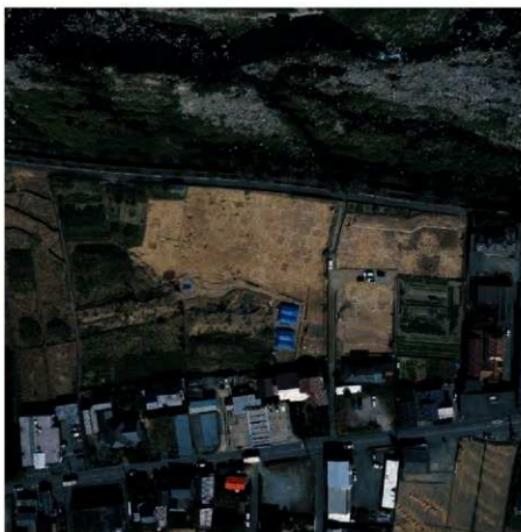
今回報告する中川原遺跡2次調査地は、大山川に接する川岸の標高130m前後の微高地に存在している。

遺跡の存在する微高地の河床からの比高差は、10m前後ほどある。この微高地は、大山川に沿い、その高まりみせ、北西（下流）方向に舌状に延び、



川と対岸の南西側は次第に低くなり、いわゆる自然堤防とみられる。

今回の調査では、この自然堤防上に営まれた先史・古代の人々の生活を窺うことが出来ている。



III 遺跡の立地と環境



遺跡が、大山川に沿い舌状に延びる微高地（自然堤防）上に形成さ
れていたことがみてとれる。

IV 調査の内容

今回の発掘調査では、古くは旧石器時代の台形石器、新しくは中世の陶磁器類などが出土している。しかし、その中心となるのは140軒近く確認された弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡群である。さらにこの住居跡群の南西側には大きな溝が存在している。

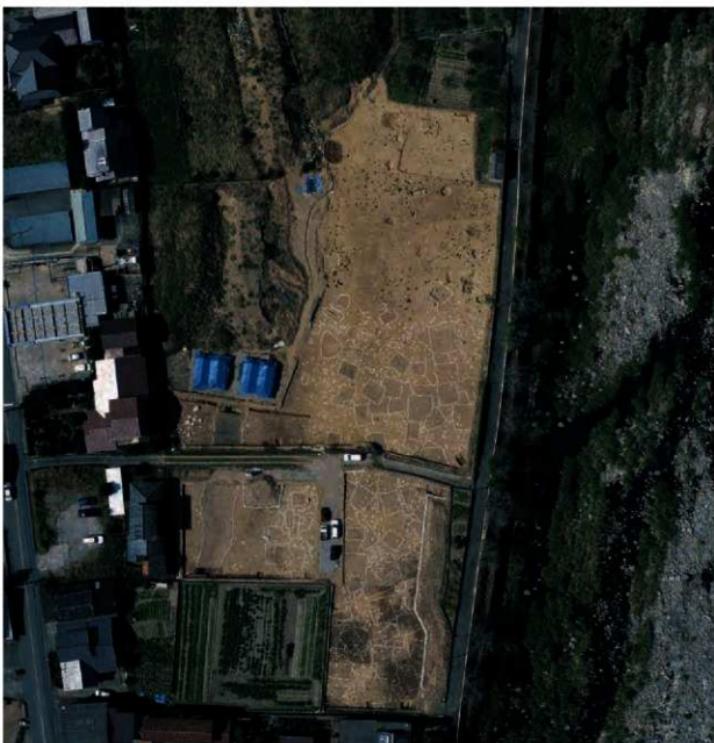
あわせて、豊富な縄文時代の資料も注目される。1軒の竪穴住居跡と複数の土坑からは、縄文後期中葉の土器や石器などのたくさんの遺物が出土したほか、

縄文早期・前期・晚期の遺物包含層も確認された。

この他、古代の堅穴住居跡3軒や古代以降の所産とみられる複数の掘立柱建物跡を検出した。

なお、これら豊富な遺構の約3分の2は、遺構の検出と、確認のために数箇所の掘り下げのみを行い、埋土保存の措置を取ることとなった。

また、今回の調査では、縄文時代の住居跡内の炉の内部とその周囲の土の自然科学分析等を試み、当時の食生活の一端を窺うことが出来ている。



調査区全景

竪穴住居跡

今回の調査範囲内において、竪穴住居跡は140軒ほど確認されている。前述のとおり、その大部分が埋土保存することとなったため、その全てを完掘したわけではない。

完掘した竪穴住居跡をみてみると、縄文時代後期



縄文時代の竪穴住居跡

この住居跡は一部を後世に欠かれているものの、非常に残りが良く、70cm程の深さがあった。平面形は一辺5m前後の正方形を呈していたものと想定される。主柱穴は4本で、床面中央には底石を持つ花弁状の石組炉を配していた。

出土土器の主体をなすのは、いわゆる“削手洗A式土器”であり、それらに磨酒縄文土器が伴う。

時期的には、後期中葉にあてられる。

が1軒、弥生時代後期が2軒、古代が3軒であった。

埋土保存となり、上面検出のみで調査を終えた130軒以上の竪穴住居跡のほとんどは、その分布と形状、そして上面より出土した遺物などから弥生時代後期から古墳時代初頭のものと思われる。



石組炉

6枚の平らな石を組んで作られた炉である。石には赤く変色した部分が見られた。



◆石組炉の検出以前

住居跡中央辺りの床近くに、灰や穀粒を多く含む褐色の土が見られた。

この土は住居内の埋土とは異なっており、結果的にはその下に石組炉が確認された。

この炭化物を含む土壌はすべて採取し、各種自然科学分析を実施している。

※分析結果は、本書〔V〕に掲載。



弥生時代の竪穴住居跡

完掘した住居跡には、主柱穴が2本のものと1本のものがみられた。いずれの住居跡も平面形は方形ないし

は長方形を呈している。写真左側の2本柱のものは約4.3m×約3.8m、写真右側の1本柱のものは約3.2m×約



2.4mの規模を有し、ともに地床が保持。時期的には出土遺物から後期にあてられる。



埋土中より多くの炭化種実が

検索された竪穴住居跡

埋土保存となった範囲内に存在している方形の遺構を検出している時、その埋土上部より数多くの炭化種実が認められた。

このことから、この炭化種実の出土（埋没）状況等を確認するため、その部分にトレーナーを設定した。なお、この方形の遺構の規模は約3.5m×約3.2mであり、竪穴住居跡とみられる。時期的には、規模や切りあい関係、上面横出等により確認された出土遺物から古墳時代初頭にあてられそうである。



炭化種実の埋没状況

トレーナーの壁から窓れる土層の堆積状況から、これら炭化種実が、住居の廃絶後、その堅穴がある程度荒らめられた段階で、廃棄ないしは遺棄されたものであることがわかった。

※炭化種実の同定結果は、本書「V」に掲載。



古代の竪穴住居跡

平面形は方形を呈す竪穴住居跡である。その規模は、約3.6m×約3.4mであり、北東側の壁の中にはカマドが掘えられている。なお、明確な柱穴は認められなかった。時期的には、出土遺物より奈良時代にあてられる。



カマド部分近景

掘立柱建物跡

調査範囲内においては、数多くのビットが検出された。それらのうち、完掘した範囲内では1棟の掘立柱建物跡が把握されたが、遺物が無く時期的な判断は出来ていない。

また、埋土保存とした範囲内においても、建物の並びを把握するまでには至らなかつたものの、柱穴とみられるビットが数多く検出され、それらの上面から古代から中世とみられる陶磁器や土師器が認められている。



掘立柱建物跡

2間（約4.5m）×3間（約6.5m）の建物跡。

溝

堅穴住居跡群の南西側において、幅7~8mの大きな溝が確認された。

確認トレント内での掘り下げ結果、約1.4mの深さの底辺の短い逆台形状の溝であることが認められた。

出土遺物は、縄文時代から古代までのものが含まれるが、量的にその中心となるのは弥生時代後期から古墳時代初頭のものとみられる土器片である。

いずれの土器等の遺物も小片が多く、あまり状態の良いものは無いため、この溝状遺構の正確な時期比定は今回の調査では困難であった。



◀溝の位置

堅穴住居跡群の南西側に位置する溝は、その対側を流れる大山川とともに住居跡群を取り囲んでいるかのようにも見えて取れる。また、大山川に沿って形成された自然堤防の後背低地への落ち際を利用して造られたものとみられる。

▼調査風景



▲西側トレントの状況



▲東側トレントの状況

土坑

調査区内では数多くの土坑が確認された。

完掘した土坑の中には、土器や石器を多く含むものもあるものの、その用途や機能が明らかなものは認められなかった。



土坑掘り下げ風景



7・8号土坑▶

平面形が、方形の土坑（8号：約1.9m×約1.7m）と円形の土坑（7号：約1.9m×1.6m）が切り合っている。ちなみに、7号土坑の方が新しい。
なお、両土坑とも弥生時代後期とみられる土器が出土している。



2号土坑

約5m×約3.8mの規模の平面形は不定形を有する土坑である。
ここからは縄文時代後期中葉（窓穴住居跡より新しい）の遺物がたくさん出土している。



◀6号土坑

平面形はやや楕円形気味の不定形を呈す土坑であり、その規模は約6.5m×約4mを測る。底面には、径45cm、深さ60cmの柱穴状のピットがみられた。
ここからは縄文時代後期中葉（窓穴住居跡に近い時期）と縄文時代前期の遺物が出土している。

遺物包含層

今回の調査地では、道構検出層より、疎らではあるが遺物の確認される範囲が複数覗えた。

このことから、それらの範囲辺りに複数のトレチを設定し、遺物包含層の有無の確認を行った。

確認トレチからは、縄文時代前期を中心にして数多くの土器や石器が出土し、遺物包含層の存在の把握は出来たものの、その遺物包含層の状況は決して良好とはいえない。それら縄文前期の遺物と同じような状況で、後・晩期や弥生時代の遺物が混ざって検出されている。



遺物包含層の土層

道構検出層下の厚さ約20cm
の淡黄褐色の砂質土層が遺物包含層。

出土遺物

今回の発掘調査では、調査範囲内全体を完掘しなかつたにもかかわらず、かなり多量の遺物が確認された。

量的に特に多いのは、やはり数多くの堅穴住居跡を検出した弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物である。

また、縄文時代の遺物が数多く出土したことでも注目されよう。



▲轟B式土器
遺物包含層等より出土。



▲曾根式土器
遺物包含層より出土。

▲▶御手洗A式土器
縄文時代の堅穴住居跡
出土土器の中で主體となる一群。





◀▲磨消繩文土器
縄文時代の堅穴住居跡出土土器の中で
主体となる一群。
これら磨消繩文土器は、いわゆる小池
原上横式土器の範疇に入るものと縦帶
文土器とかわられるもの。またその両方
の傾性を有するものがみられる。
なかには、右側2点のように鶴の目を
施さず、同様の文様を沈線のみで描く
ものもみられる。



◀鶴部が屈曲しないもの

▼鶴部が屈曲するもの

▲▶鶴文住居跡より出土の
その他土器
御手洗人式土器と磨消繩文土
器とともに縄文時代の住居跡
より出土した土器。
鶴部は無文で、口唇部に刻目
が施されているものと施して
いないものがある。





弥生時代後期～古墳時代初頭▲
の変形土器



弥生時代後期～古墳時代初頭▶
の変形土器



◆弥生時代後期～古墳時代初頭の
さまざまな土器

今回の調査では、堅穴住居跡から数多くの土器が出土している。上の変形土器や変形土器以外にも、高杯や鉢形土器や皿形土器、その他に器付の鉢形土器など、その種類も多くみられる。



▲石鏃

今回の調査では、数多くの石鏃が出土した。
上段は黒磚石製、下段は安山岩（サスカイト）製。



▲鋸歯鏃

縄文時代の堅穴住居跡からは通常よくみられる石鏃とともに、刃部に鋸歯状の加工の施されたものが、一定量出土している。



▲スクレイパー

写真の4点は、いずれも安山岩（サスカイト）製である。
上段は遺物包含層より縄文時代前期の土器とともに出土したものである。下段は縄文時代の住居跡から出土したものである。



石錐出土状況▶

縄文時代の堅穴住居跡からは51点もの多くの石錐が出土している。

▼石錐

縄文時代の堅穴住居跡から出土した石錐には、重さが137.4 g～5.7 g、長軸の長さが約7.8cm～2.6cmまでのものがある。
石材は、角閃安山岩やデイサイトなどの安山岩である。





▲磨製石斧

縄文時代の竪穴住居跡より出土。
上段は結晶片岩製、下段は粘岩製。



▲▼打製石斧

上の左側は2号土坑、
右側が6号土坑出土。
石材は、下の上段左側
が凝灰質角閃安山岩、
右側が輝石安山岩。そ
の他は、角閃輝石安
山岩。



▲磨製石斧

上段は遺物包含層より出土。
上段は蛇紋岩製、下段はホルンフェルス製。



◀▼打製石斧 ●印の箇所に使用痕がみられる。

左はガラス質緻密安山岩、下は角閃安山岩。



▲石砲丁

輝緑凝灰岩製。



▲鉄鏡



▲ガラス製小玉

径3.65mm。
竪穴住居跡
(110号住)
の埋土から出土。

V 自然科学分析

中川原遺跡2次調査出土の炭化種実

1.はじめに

中川原遺跡は大分県日田市大山村西大山に位置し、日田盆地の南に広がる山間部、大山川左岸の自然堤防である微高地上に立地する。中川原遺跡2次調査では、縄文時代後期中葉の住居跡（3号土坑）の炉内および周辺の土壌を回収された。また弥生時代後期終末の堅穴住居跡である106号住から肉眼で炭化種実が取り上げられ、古墳時代初頭の堅穴住居跡である69号住からは、住居跡内の埋土上部から直径1cm程度の楕円形の炭化種実がまとまって出土したため取り上げられた。ここでは炭化種実に関して同定を行い、利用植物や周辺の植生について検討した。

2.試料と方法

試料は、縄文時代後期中葉（御手洗式期）の住居跡である3号土坑で検出された石圓炉内および周辺から回収された土壌、古墳時代初頭の堅穴住居跡である69号住と弥生時代後期終末の堅穴住居跡である106号住から現場で一括採取された炭化種実である。

3号土坑の試料は炉上部B、炉上部①～④、炉内、炉周辺、炉の底石真下、炉の底石横と下、炉の掘り方内に区分して取り上げられた84試料である。各サンプルの土壤重量を表1に示す。重量は乾燥重量

表1 各試料の土壤重量		合計約90kgである。
位置	重量(g)	
炉上部B	10278	号住はNo. 1～5とNo. 7
炉上部①	3056	の6試料、106号住はNo.
炉上部②	3616	6の1試料である。
炉上部③	4054	
炉上部④	5428	試料の採取は日田市教育
炉内	12792	文化財保護課によって行
炉周辺	2662	われた。土壌の洗浄方法は、
炉の底石真下	1657	0.5mm目の篩を用いたフロ
炉の底石横と下	1805	ーテーション法により浮遊
炉の掘り方内	44120	
合計	89502	

物を回収したあと、0.5、1.0、2.0mm目の篩を用いて、水洗した。現場で一括採取された種実遺体は、分類をしやすくするため、1.0と2.0mm目の篩を用いて再度水洗した。炭化種実の抽出・同定・計数は、肉眼および实体顕微鏡下で行った。破損は完形として計数し、堅果類は半割れと半割れ未満の破片を区別した。同定された試料は日田市教育委員会に保管されている。

3.結果

同定の結果、木本植物のコナラ属アカガシ亜属A炭化子葉と、コナラ属アカガシ亜属B炭化果実・炭化子葉、コナラ属アカガシ亜属炭化果実、クワ属炭化核、カラスザンショウ炭化種子、ブドウ属炭化種子、モモ炭化核の7分類群、草本植物のマメ科炭化種子、イネ科炭化果実の2分類群、計9分類群が得られた。コナラ属の子葉破片で亜属以下の同定ができるなかった一群はコナラ属とした。ブドウ科は木本と草本植物の双方を含むが、便宜的に木本植物に含めた。また、生の針葉樹の葉が得られたが、遺構の立地から生の植物は遺存しないと考えられるため、現生として扱った。この他に複数種含まれると思われる科以下の同定ができなかつた一群を不明炭化種実とし、特徴的なものはA～Cを付して分類した。状態が悪いため科以下の識別点を欠く一群を同定不能炭化種実とした。遺構別の同定結果を表2・3に示す。

以下に遺構・位置別の炭化種実を記載する（現生と不明・同定不能種実はのぞく）。なお、括弧内の重量は水洗した土壤重量を示す。

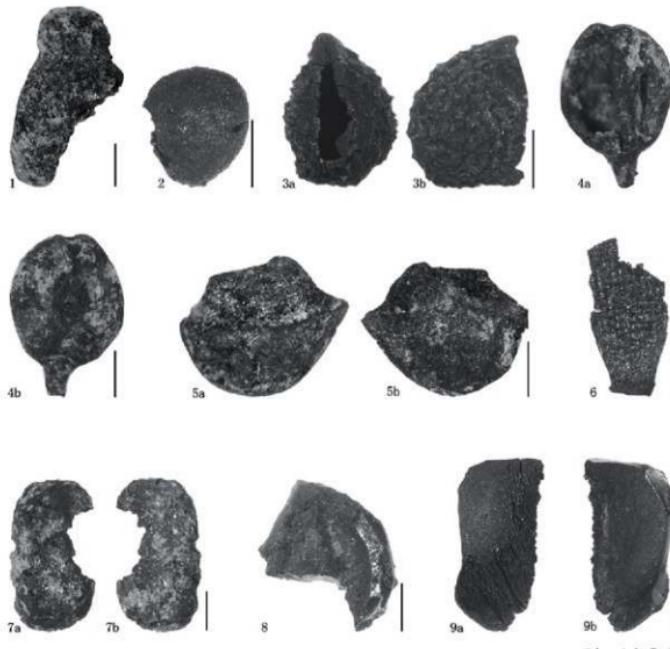
[3号土坑]

炉上部B（10,278g）：カラスザンショウ種子がやや多く、ブドウ科種子と不明A種子がわずかに得られた。

炉上部①（3,056g）：カラスザンショウ種子がやや多く、ブドウ属種子とイネ科果実がわずかに得

表2 3号土坑から出土した炭化種実(括弧は破片を示す)

分類群	位置	炉上部B	炉上部①	炉上部②	炉上部③	炉上部④	炉内	炉周辺	炉の底石 真下	炉の底石 横と下	炉の掘り 方内
針葉樹	葉	10278	3056	3616	4054	5428	12792	2662	1657	1805	44120
コナラ属アカガシ亜属	炭化果実						(1)				(5)
コナラ属	炭化子葉							(3)			
クワ属	炭化核							1			
カラスザンショウ属	炭化種子	1 (11)	1 (9)	(5)	1 (3)	(5)	1 (7)	1			(8)
ブドウ属	炭化種子		1 (1)	(1)							
ブドウ科	炭化種子	(1)			(1)		(1)	(1)	(1)		
マメ科	炭化種子										(1)
イネ科	炭化果実			(1)							
不明A	炭化種子		(2)								
不明B	炭化核				(3)						
不明C	炭化種実										(1)
不明	炭化種実	(99)	(57)	(28)	(40)	(59)	(67)	(34)	(9)	(7)	(112)
固定不能	炭化種実	(23)	(31)	(18)	(42)	(159)	(148)	(1)	(15)	(7)	(120)



図版1 中川原遺跡2次の調査時代住居跡（3号土坑）から出土した炭化種実

1.コナラ属アカガシ亜属炭化果実(No.58-1、炉の掘り方内)、2.クワ属炭化核(No.54-1、炉内)、3.カラスザンショウ炭化種子(No.28-1、炉周辺)、4.ブドウ属炭化種子(No.12-1、炉上部①)、5.マメ科炭化種子(No.82、炉の掘り方内)、6.イネ科炭化果実(No.10-1、炉上部①)、7.不明A炭化種子(No.25-1、炉上部B)、8.不明B炭化核(No.35-1、炉上部③)、9.不明C炭化種実(No.72、炉の掘り方内)

られた。

炉上部②(3,616g)：カラスサンショウ種子とブドウ属種子がわずかに得られた。

炉上部③(4,054g)：カラスサンショウ種子と不明B核がわずかに得られた。

炉上部④(5,428g)：カラスサンショウ種子とブドウ科種子がわずかに得られた。

炉内(12,792g)：カラスサンショウ種子がやや多く、コナラ属子葉とクワ属核、ブドウ科種子がわずかに得られた。

炉周辺(2,662g)：カラスサンショウ種子とブドウ科種子がわずかに得られた。

炉の底石真下(1,657g)・炉の底石横と下(1,805g)：同定可能な種実は得られなかつた。

炉の掘り方内(44,120g)：カラスサンショウ種子がやや多く、コナラ属アカガシ亜属果実ヒマメ科種子がわずかに得られた。

[69号住]

No. 1-5, 7: コナラ属アカガシ亜属B果実の完

分類群	部位	表3 弥生時代後期終末から古墳時代初頭の住居跡から出土した炭化種実	
		69号住 No. 1-5, 7	106号住 No. 6 (1)
コナラ属アカガシ亜属A	炭化子葉		
コナラ属アカガシ亜属B	炭化果実	1 (10) (15)	
	炭化子葉	288 (357) (650)	
モモ	炭化核	1	

左側の括弧は半割れ、右の括弧内の数字は半割れ未満の破片数を示す。

形が1点、半割れが10点、半割れ未満の破片が15点、子葉の完形が288点、半割れが357点、半割れ未満の破片が650点、モモ核が1点得られた。

[106号住]

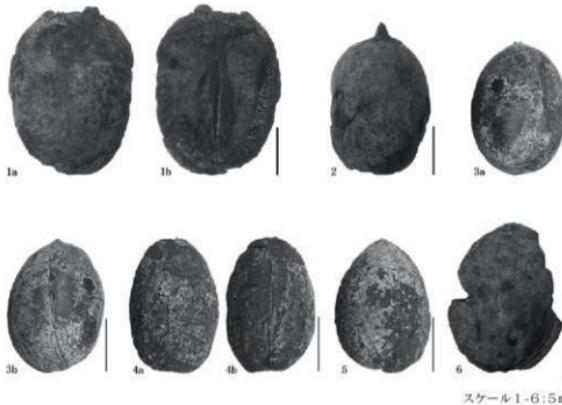
No. 6: コナラ属アカガシ亜属A子葉の半割れが1点得られた。

以下に得られた炭化種実の記載を行い、図版に代表的な個体の写真を示して同定の根拠とする。

(1) コナラ属アカガシ亜属A *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp. A 炭化子葉 ブナ科

上面観は円形、側面観はやや角がある梢円形。Bの子葉よりもひとまわり大きい。溝は全体の約半分の長さ。長さ15.4mm、幅10.4mm。

(2) コナラ属アカガシ亜属B *Quercus* subgen.



図版2 中川原遺跡2次の弥生～古墳時代住居跡から出土した炭化種実

1.コナラ属アカガシ亜属A炭化子葉(106号住)、2.コナラ属アカガシ亜属B炭化果実(69号住)、3-5.コナラ属アカガシ亜属B炭化子葉(69号住)、6.モモ炭化核(69号住)

Cyclobalanopsis sp. B 炭化果実・炭化子葉 ブナ科

果実の側面観は梢円形～長梢円形で、柱頭が突出し、細長い。着点は中央部が尖るものが多い。長さ15.4mm、幅10.4mm。炭化子葉の側面観は俵形だが非対称。先端の突出はあるが、おむね縦方向に明瞭な溝か？本確認できるためイチイガシに類似するが、溝が浅いものや複数あるもの等、変異幅が大きかったため、アカガシ亜属Bの同定に留めた。長さ11.7～13.0（平均12.4）mm、幅8.7～9.1（平均8.9）mm。

(3) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* spp. 炭化果実 ブナ科

破片であるが本来は梢円形か。果実の柱頭が明瞭に盛り上がることから、コナラ属アカガシ亜属の果実と同定されるが、状態悪く亜属以下の同定ができなかったものをコナラ属アカガシ亜属とした。

(4) クワ属 *Morus* spp. 炭化核 クワ科

側面観はいびつな広倒卵形または三角状倒卵形で、断面形は卵形または三角形。背面は稜をなす。表面はゆるやかな凹凸があり、厚くやや硬い。基部に嘴状の突起を持つ。長さ1.9mm、幅1.6mm。

(5) カラスサンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc. 炭化種子 ミカン科

上面観は卵形、側面観は梢円形。表面には大きな網目模様があり、一方の側面には、大きな着点がある。着点は種子の長さとほぼ同じかやや短い。長さ2.8mm、幅2.1mm程度。

(6) ブドウ属 *Vitis* spp. 炭化種子 ブドウ科

上面観は梢円形、側面観は先端が尖る円形。背面のほぼ中央に匙状の着点があり、腹面は縦方向に2本の狭く深い溝がある。種皮は薄く硬い。長さ3.7mm、幅2.5mm程度。ヤマブドウではない。なお、ブドウ属とノブドウの識別点となる背面側が残存していない破片はブドウ科としたが、大多数はブドウ属に含まれると思われる。

(7) モモ *Amygdalus persica* L. 炭化核 バラ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は梢円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い

溝がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝に入る。長さ17.2mm、幅13.3mm。

(8) マメ科 Leguminosae spp. 炭化種子

全体の約1/4が残存する。側面観はゆがんだ長梢円形。臍および初生葉が残存していないが、全体の形状からマメ科とした。形状はササゲ属に似る。

(9) イネ科 Gramineae spp. 炭化果実

破片で、表面には微細な顆粒状の隆起がある。イネの可能性があるが、状態が悪いためイネ科とした。

(10) 不明A Unknown A 炭化種子

半割の破片か。側面観は梢円形。内面は緩やかにやや窪む。残存状況が悪く、初生葉や臍の部分は欠けているが、マメ科種子の可能性が高い。長さ4.0mm、幅2.5mm。

(11) 不明B Unknown B 炭化核

核の破片か。硬く光沢がある。残存長3.5mm、残存幅2.8mm。

(12) 不明C Unknown C 炭化種子

堅果類の破片か。外面はやや湾曲する。表面は平滑で、断面は鋭角で光沢がある。残存長6.5mm、残存幅3.5mm。

4. 考察

3号土坑から出土した炭化材3点を用いた放射性炭素年代測定の結果、2212-2019calBCの曆年代範囲が得られ、繩文時代後期前葉を中心とした年代であった（放射性炭素年代測定の項参照）。3号土坑からは、2kg以上水洗した試料には必ずといって良いほど、カラスサンショウ種子が含まれていた。カラスサンショウの種子は現在ではほとんど利用法がないが、新潟県野地遺跡では繩文時代後・晩期の廻棄層でクリ果実やトチノキ種子などと一緒にカラスサンショウ種子の半数が削れた状態で多量に廻棄されており、香辛料や薬用としての利用が推定されている（吉川、2009）。日田市内では葛原遺跡6次調査で、弥生時代中期初頭の1号堅穴住居跡の地床がである中央土坑からカラスサンショウ種子が出土しており、がという場所である点を考慮すると何ら

かの形で利用した可能性が指摘されている（ハレオ・ラボ、印刷中）。本遺跡でも炉の上面から炉内および掘り方内にかけて産出し、破片が多いことから人間による利用が推定される。さらに3号土坑では食用可能なブドウ属やクワ属がわざかに得られた。ブドウ科には食用にならないノブドウと食用になるブドウ属があるが、破片のため属以下の同定ができずブドウ科とした試料も形状から判断するとブドウ属の可能性がある。掘り方内から出土したコナラ属アカガシ亜属は食用可能で、果実が確認されたことから、住居内で皮むきをおこない、その残渣を炉で燃やした可能性がある。同じく掘り方内から出土したマメ科種子には栽培種と野生種があるが、状態が悪く区別はできなかつた。形状からササゲ属の可能性があるが、属以下の同定の識別点となる胚や初生葉は確認できなかつた（小畠はか、2007）。

また炉上部①からイネ科果実が出土した。微細な破片であるために、科以下の同定ができなかつたが、顆粒状の隆起はイネの果実（穀殻）に類似する。プランツ・オ・パール分析の結果、炉上部④と炉内からはイネの機動細胞珪酸体（葉や茎に付く珪酸体）がわざかに検出されており（植物珪酸体分析の項参照）、中川原遺跡において縄文時代後期にイネが利用された可能性がある。ただし、量的に少ないため、後世の混入の可能性も含め堆積状況や考古遺物からも慎重に検討する必要があろう。

弥生時代後期終末の堅穴住居跡である106号住からはコナラ属アカガシ亜属の炭化子葉が1点得られた。

古墳時代初頭の堅穴住居跡である69号住からは栽培植物のモモが1点と、コナラ属アカガシ亜属Bの果実および子葉が多量に出土した。アカガシ亜属Bには計数出来なかつた微細な果皮片が多く含まれることから、すべて果実の状態のもののが炭化したと推定される。果実とするならば、住居内に貯蔵されていた可能性がある。埋土上層から出土したことから、棚などに保管されていたものであろうか。あるいは別の場所で貯蔵された果実が住居跡内に廃棄さ

れたことが考えられる。いずれにせよ、食用とならない競斗や未熟果は含まれていないことから、人為的に集められたと推定される。子葉の完形数が288点で、半割れの破片数が357点のため、復元個体数を求めるとき約470点である。さらに半割れ未満の破片数が650点含まれておそれらを加味すると、全体では600~700点ほど含まれていたと推定される。子葉の形状の変異幅が大きいため、複数種含む可能性があるが、イチイガシに類似する子葉が多かつた。モモは2cm未満の小型のタイプであった。

以上の同定結果から、中川原遺跡では、縄文時代後期から古墳時代初頭までアカガシ亜属の利用が推定される。また土壤から水洗して炭化種実を抽出した3号土坑からは利以下の同定ができなかつた不明種火や同定不能炭化種実が多量に得られていることから、多くの炭化種実は灰になって失われ、偶発的に形状をとどめて炭化したものか同定されたと考えられる。

（佐々木由香・バンダリ・スダルシャン）

引用文献

- 小畠弘己・佐々木由香・仙波靖子（2007）土器压痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培。植生史研究15(2), 97-114。
吉川純子（2009）出土種実による植物利用解析。財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団編「野地遺跡」：136-152。新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団。

放射性炭素年代測定

1.はじめに

大分県日田市に位置する中川原遺跡2次調査より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。試料の採取は藤根、試料の調製は山形、瀬谷、Lomtadidze、Jorjorianiが¹、測定は小林、丹生、伊藤が行い¹、本文は佐々木、伊藤が作成した。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は縄文時代後期中葉に想定されている堅穴住居跡(3号土坑)の勾跡内から出土した炭化材3点、調査区内において検出され、堅穴住居出土のものと同型式で、刺突連点文をもつ脚手洗A式の土器内面付着炭化物、2号土坑から出土した土器外側付着炭化物の計5点である。2号土坑内出土の土器は混入で、ミミズバレ状隆帯文をもつ縄文時代前期の轟B式とされている。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 L.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年に較正した年代範囲を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

曆年較正

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal4.1(較正曲線データベース)

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-10540	遺構: 3号土坑炉上部② 試料No. 9	試料の種類: 炭化材(2年輪?: アカガシ亜属) 試料の性状: 不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-10541	遺構: 3号土坑炉上部B 試料No. 26	試料の種類: 炭化材(6年輪: マツ属) 試料の性状: 不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-10542	遺構: 3号土坑炉周辺 試料No. 29	試料の種類: 炭化材(3年輪: 针葉樹A) 試料の性状: 不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-11183	I 区	試料の種類: 土器付着物・内面(おこげ) 器種: 深鉢(脚手洗A式) 部位: 内面(口縁部ー胴部) 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-11184	遺構: 2号土坑(混入)	試料の種類: 土器付着物・外側(ふきこぼれ) 器種: 深鉢(轟B式) 部位: 口縁外側 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス

表2 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-10540 3号土坑 炉上部②	-27.78 ± 0.24	3697 ± 27	3695 ± 25	2135BC (17.7%) 2112BC 2102BC (50.5%) 2036BC	2196BC (6.0%) 2169BC 2146BC (87.2%) 2019BC 1995BC (2.2%) 1981BC
PLD-10541 3号土坑 炉上部B	-26.41 ± 0.25	3747 ± 30	3745 ± 30	2203BC (56.9%) 2134BC 2081BC (11.3%) 2061BC	2280BC (6.7%) 2250BC 2230BC (1.6%) 2220BC 2212BC (63.2%) 2114BC 2101BC (23.9%) 2037BC
PLD-10542 3号土坑 炉周辺	-25.16 ± 0.29	3717 ± 31	3715 ± 30	2193BC (9.4%) 2178BC 2143BC (16.7%) 2119BC 2097BC (42.1%) 2040BC	2202BC (95.4%) 2028BC
PLD-11183 御手洗A式	-20.42 ± 0.20	4022 ± 28	4020 ± 30	2573BC (20.9%) 2550BC 2537BC (47.3%) 2491BC	2620BC (3.0%) 2606BC 2600BC (1.4%) 2593BC 2587BC (91.0%) 2472BC
PLD-11184 轟B式	-27.87 ± 0.19	5262 ± 29	5260 ± 30	4225BC (10.6%) 4207BC 4162BC (19.1%) 4131BC 4071BC (21.6%) 4037BC 4021BC (16.9%) 3995BC	4229BC (14.0%) 4198BC 4172BC (32.9%) 4089BC 4084BC (48.5%) 3986BC

タ: INTCAL09) を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び曆年較正を行った。得られた曆年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それより確かに年代の範囲が示された。

2σ の曆年代範囲に注目して年代を整理する。 2σ 曆年代範囲は、95.4% の確率で年代がこの範囲に収まることを意味する。

3号土坑から出土した炭化材は 3 点とも近似した値を示し、炉上部② (PLD-10540) から出土した炭化材がやや新しく、炉上部B (PLD-10541) と炉周辺 (PLD-10542) から出土した炭化材は測定誤差を考慮するとほぼ同じ年代が得られた。

炉上部② (PLD-10540) は 2146-2019calBC (87.2%) が最も確率が高く、同様に炉上部B

(PLD-10541) は 2212-2114calBC (63.2%)、炉周辺 (PLD-10542) では 2202-2028calBC (95.4%) であった。年代値について、国立歴史民俗博物館によって報告されている縄文時代の土器付着炭化物の曆年代範囲と比較すると（西本編、2006、2007）、縄文時代後期前葉を中心とした年代値であった。ただし、測定した炭化材は最外輪 (= 伐採年) 以外の部位不明の年輪部分を測定試料としたため、伐採年より内側の年輪数分古い年代値が得られていることを考慮する必要がある。御手洗 A 式の土器内面付着炭化物 (PLD-11183) の曆年代は 2587-2472calBC (91.0%) の確率が高く、炭化材と比較すると、 ^{14}C 年代の中央値で約 300 年古い値が得られた。古い値が得られた要因として、測定試料の炭化物にアルカリで不溶性の炭素混入物が含まれており前処理で除去できなかつたか、測定試料が土器内面付着炭化物のため、内容物に貝などが入っており、海洋リザーバー効果によって古くなつた可能性が考えられる。

また轟 B 式の曆年代は、4084-3986calBC (48.5%)、4172-4089calBC (32.9%) であった。大分県内の轟 B 式の測定例をみると、九重町の二日市洞穴から出土した土器付着炭化物 (PLD-6275) で測定例があり、 ^{14}C 年代で 5160 ± 20 yrBP、 2σ

の層年代で3995-3950calBC (89.0%) の年代が報告されている (遠部, 2006)。轟B式の土器付着炭化物の年代測定例は非常に少ないため、今後試料の蓄積を待って、土器の年代観について議論する必要があろう。

(パレオ・ラボAMS年代測定グループ:
伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫・
小林恵一・Zaur Lomtadze・
Ineza Jorjoliani・藤根 久・佐々木由香)

【参考文献】

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the

Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代のC年代. 3-20.

西本豊弘編 (2006) 新弥生時代のはじまり第1巻 弥生時代の新原と143p. 雄山閣.

西本豊弘編 (2007) 新弥生時代のはじまり第2巻 繩文時代から弥生時代へ. 185p. 雄山閣.

遠部, 肇 (2006) 北・東部九州における縄文時代草創期～早期前半の諸様相-大分県九重町二日市駒穴の年代測定-. 九州縄文時代早期研究ノート, 第4号, 19-25. 九州縄文時代早期研究会.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.H.J., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmelt, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

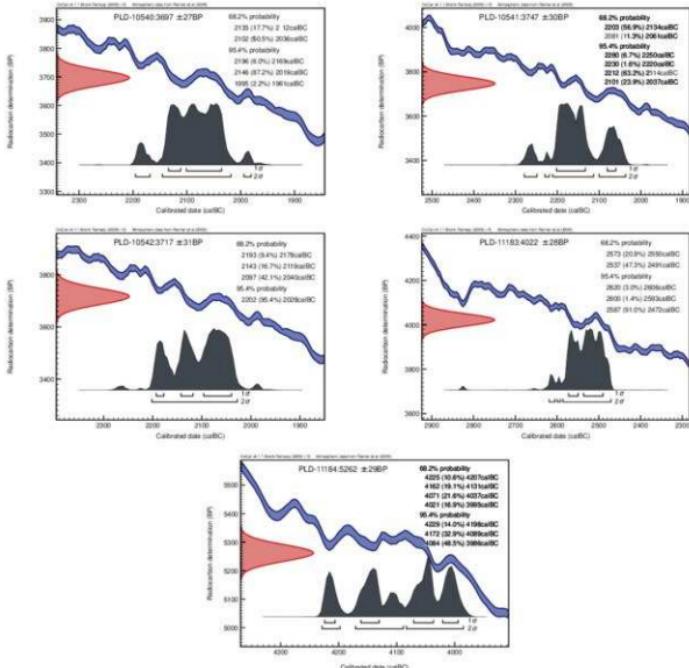


図1 年齢校正結果

植物珪酸体分析

1. はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物ともいわれ根より大量の珪酸分を吸収し葉や茎の細胞内に沈積させることが知られている。こうして形成されたものを植物珪酸体（機動細胞珪酸体や单細胞珪酸体など）といい、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。

中川原遺跡2次調査において検出された縄文時代後期の堅穴住居跡は床面中央に石底を持つ石組炉を配しており、この炉跡より土壤試料が採取された。この土壤試料について植物珪酸体分析を行い、上記のことからがい用いたイネ科植物について観察される機動細胞珪酸体から検討した。

2. 試料と分析方法

分析用試料は縄文時代後期の堅穴住居跡床面中央に認められた炉の炉内（試料1）と炉上部採取された2試料（試料番号2：炉上部④、試料番号3：炉上部B）の3試料である。土相について、これら3試料とも炭化物を含む褐色の砂である。これら3試料について以下のような手順にしたがって植物珪酸体分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスピース（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱水処理を行う。処理後、水を加え、超音波モジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よ

りグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスピースが300個に達するまで行った。

3. 分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスピース個数の比率から試料1g当たりの各機動細胞珪酸体個数を求め（表1）、それらの分布を図1に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当たりの検出個数である。

検鏡の結果、試料1,2よりイネが若干検出され、個数的にはいずれも1,000個を示している。最も多く観察されたのはクマザサ属型で、全試料50,000個以上と他の分類群と比べ非常に高い数値を示している。その他ではネササ節型が3,000個前後、ウシクサ族が2,000個前後、ヨシ属とキビ族が1,000個前後を示して検出されている。

4. イネについて

上記したように炉内および炉上部④試料から若干のイネの機動細胞珪酸体が検出された。ここでイネの検出個数について示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料1g当たり5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原、1984）。こうしたことから、稻作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。今回の分析では1,000個と5,000個に比べかなり少ない。また炉上部④試料については別にプレパラートを作成して観察したがイネの機動細胞珪酸体は認められなかった。時代は縄文時代後期と古く、検出個数も少

表1 試料1g中の機動細胞珪酸体個数

試料番号	試料採取部位	イネ (個/g)	ネササ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	炉内	1,000	3,800	52,900	0	1,000	1,900	2,900	1,900
2	炉上部④	1,000	1,000	58,700	1,000	1,900	0	1,900	1,900
3	炉上部B	0	2,800	77,400	900	900	900	900	0

ないことから別の試料の検討をもあわせ、イネの存在についてはさらなる確認作業が必要と考える。

5. 植物珪酸体分析結果について

クマザサ属型が非常に多く検出されているが、炉内試料と炉上部試料に大きな違いは認められなかつた。また、機動細胞珪酸体のほかに他の部位の珪酸体は観察されなかつた。一般にイネ科植物を焼いた灰には機動細胞珪酸体のほか単細胞や長細胞等各部位の珪酸体も観察される。しかしながら先にも記したが3試料とも機動細胞珪酸体のほかは観察されなかつたことから今回行った分析試料中には灰試料が混入していなかつたと判断される。よって今回行った植物珪酸体分析から焼いた植物について検討する資料は得られなかつた。

なおクマザサ属型が多く検出されており、このクマザサ属型のササ類（スズタケ、ミヤコササなど）は遺跡周辺に成立していた森林の下草の存在で多く生育していたとみられる。その他、ネササ節型はケネササやゴキダケ、キビ族はイスビエやエノコログサなど、ウシクサ族はススキやチガヤなどと考えられよう。またヨシ属はヨシやツルヨシなどがあり、これらが生育する湿地などの水域の存在が推測される。

（鈴木 茂）

【引用文献】

- 藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（I）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—」、考古学と自然科学, 9, 15-29。
 藤原宏志（1984）「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—」、考古学ジャーナル, 227:2-7。
 藤原宏志・佐々木彰（1978）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状—」、考古学と自然科学, 11, 9-20。

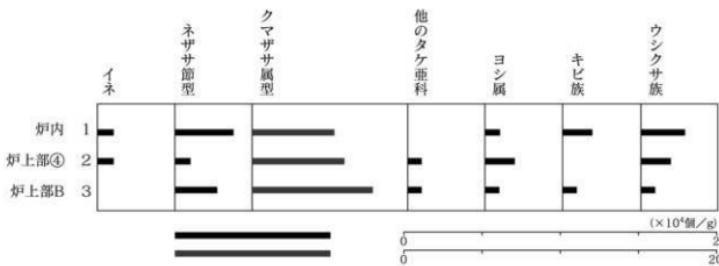
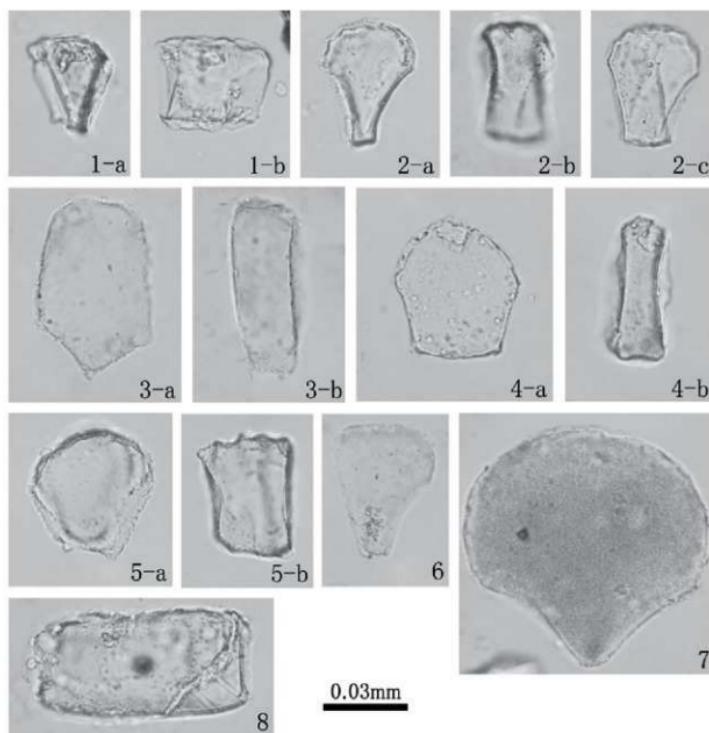


図1 中川原道路2次調査の機動細胞珪酸体分布図



図版1 中川原遺跡2次調査の植物珪酸体

- 1、2：イネ（a：断面、b：側面、c：側面） 1：炉内、2：炉上部④
- 3、4：クマザサ穂型（a：断面、b：側面） 3：炉内、4：炉上部B
- 5：ネササ穂型（a：断面、b：側面） 炉上部④
- 6：ウシクサ穂（断面） 炉上部④
- 7：ヨシ穂（断面） 炉上部④
- 8：キビ族（側面） 炉上部④

堅穴住居跡炉跡出土炭化材の樹種同定

1.はじめに

中川原遺跡は、日田市に位置し、大山川左岸の標高130m前後の微高地に立地する遺跡である。2次調査では、古代の堅穴住居跡、弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴住居跡、縄文時代後期の堅穴住居跡、その他掘立柱建物跡や溝などが検出されている。縄文時代後期の堅穴住居跡が跡内からは、燃料とした炭化材が出土した。

ここでは、縄文後期の堅穴住居跡の炉跡から出土した炭化材を同定し、燃料材について検討した。

2. 試料と方法

炭化材試料は、中川原遺跡2次調査の縄文時代後期の堅穴住居跡（3号土坑）から出土した炭化材22試料である（表1）。試料は土壤を水洗した中から得られたものである。水洗後、樹種同定が可能な大きさの炭化材を抽出した。炉上部は①から④まで取り上げられていたが、なるべく下位層から抽出した。層別別の試料数炉上部②が1点、炉上部③が14点、炉上部④が1点、炉上部Bが9点、炉内が6点、炉周辺が1点である。

試料は、カミソリ刃などを用いて3断面（横断面、接線断面、放射断面）を作製し、直径1cmの真鍮試料台に両面テープで固定し銀ベーストを塗布した後、金蒸着を行った。観察および同定は、走査型電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM-5900LV型）を使用した。

なお、一部の炭化材についてAMS法による放射性炭素年代測定を行い、 $\pm \sigma$ 暦年代較正において炉上部②については2146-2019calBC (87.2%)、炉上部Bは2212-2114calBC (63.2%)、炉周辺は2202-2028calBC (95.4%) の暦年代範囲が得られている（詳細は年代測定の報告参照）。

3. 結果

縄文時代後期中葉の堅穴住居跡（3号土坑）から

出土した炭化材の樹種を同定した結果、常緑針葉樹のカヤ、スギ、ヒノキ属と、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ亜属）、ツバキ属、アオキ、落葉広葉樹のクワ属の7分類群が見いだされた。その他に材組織が不明瞭であった針葉樹A、Bと、広葉樹の散孔材A、広葉樹があつた。

以下に出土位置別の樹種組成を示す。

炉上部では、炉上部②～④（炉石の直上部分）から、ヒノキ属と、アカガシ亜属、ツバキ属、クワ属、広葉樹が得られ、炉上部B（炉石直上から外れた部分）では、マツ属と、スギ、ヒノキ属、アカガシ亜属、アオキが得られた。ヒノキ属とアカガシ亜属が共通樹種であった。

一方、炉内では、カヤと、クワ属、散孔材、針葉樹Bが得られ、炉上部④と共通する樹種は、クワ属のみであった。

炭化材の樹種には選択性はなく、主に周辺に生育する針葉樹や常緑広葉樹などを燃料材として利用したことか推定される。いずれの試料も一辺が5mm角以下の微小試料であったため、同定できなかつた分類群もあつた。燃料材に使用された本米の樹種組成は不明であるが、同定された中ではアカガシ亜属とクワ属が多かつた。同定された樹種から周辺植生を考えると、遺跡周辺にはアカガシ亜属やツバキ属など生育する照葉樹林に混じって、カヤやスギ、ヒノキ属などの常緑針葉樹が生育していたことが考えられる。今後、当地域の花粉分析などを行うことにより、周辺植生に関する詳細な情報が得られると期待される。

以下に分類群別の記載と写真を示し、同定の根拠とする。

(1) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 国版1 1a-1c (試料No.16)

假道管、放射柔細胞からなる針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかである。分野壁孔は小さなヒノキ型が2個ある。假道管の内壁にはらせん肥厚が見られる。

表1 中川原遺跡2次調査3号土坑樹種同定結果

試料No.	取上げNo.	遺構名	位置	分類群	年代測定番号
1	9	3号土坑	炉上部②	アカガシ亜属	PLD-10540
2	1	3号土坑	炉上部③	広葉樹	
3	35-1	3号土坑	炉上部③	アカガシ亜属	
4	35-2	3号土坑	炉上部③	ツバキ属	
5	36-1	3号土坑	炉上部③	ヒノキ属	
6	40	3号土坑	炉上部④	クワ属	
7	20-1	3号土坑	炉上部B	ヒノキ属	
8	20-2	3号土坑	炉上部B	スギ	
9	21	3号土坑	炉上部B	アカガシ亜属?	
10	23-1	3号土坑	炉上部B	アカガシ亜属	
11	23-2	3号土坑	炉上部B	ヒノキ属	
12	25-1	3号土坑	炉上部B	アオキ	
13	25-2	3号土坑	炉上部B	アカガシ亜属	
14	26-1	3号土坑	炉上部B	マツ属	PLD-10541
15	32-1	3号土坑	炉上部B	アカガシ亜属	
16	2	3号土坑	炉内	カヤ	
17	5-1	3号土坑	炉内	散孔材A	
18	8	3号土坑	炉内	クワ属	
19	46-1	3号土坑	炉内	クワ属?	
20	46-2	3号土坑	炉内	クワ属	
21	51-1	3号土坑	炉内	針葉樹B	
22	29	3号土坑	炉周辺	針葉樹A	PLD-10542

カヤは、本州の宮城県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木で、種子は食用となり油も取れる。材は水湿に強く加工しやすい。

(2) マツ属 *Pinus* マツ科 国版 2a-2c(試料 No.14)

仮道管、水平と垂直の樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞、放射柔細胞および放射仮道管からなる針葉樹である。早材の終わりから晩材への移行は急で、晩材の量は多く、垂直樹脂道は早材から晩材にかけて見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管があり、その内壁には鋸状の肥厚がある。放射組織は1~10細胞高である。

マツ属は、暖帯から温帯下部に生育するアカマツとクロマツ、暖帯から温帯に分布するゴヨウマツやチョウセンゴヨウがある。材は、いずれも保存性が高く、建築材や漆器木地、杭材など幅広く利用される。

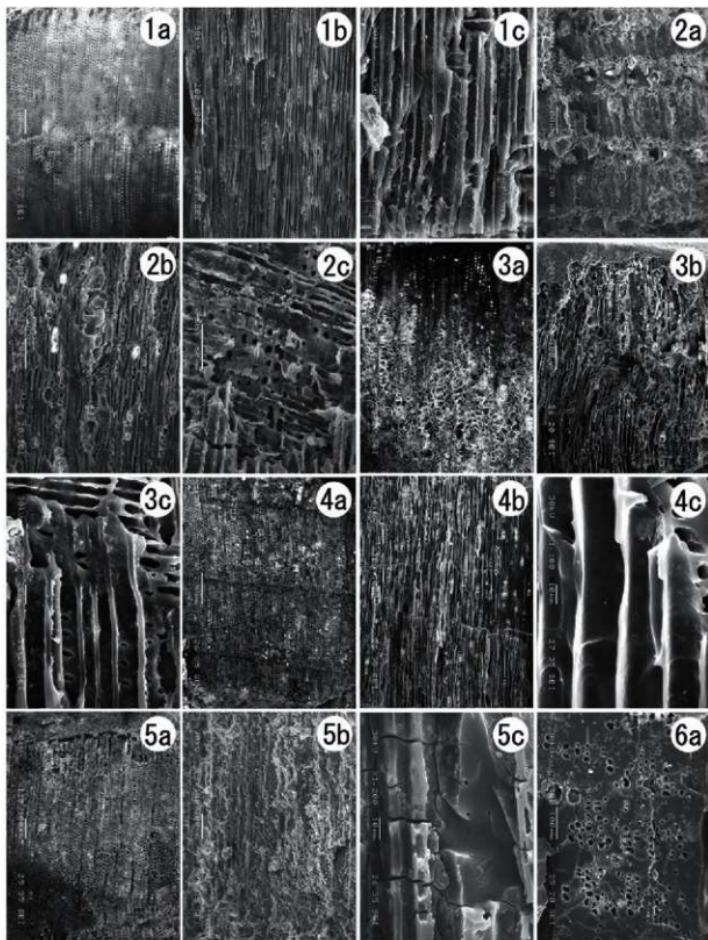
(3) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 国版1 3a-3c (試料No.8)

仮道管と放射柔細胞および樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量が多い。分野壁孔は孔口が水平に大きく開いたスギ型で1分野に2個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿潤のある谷間に生育する常緑高木である。材はやや軽軟で加工は容易である。

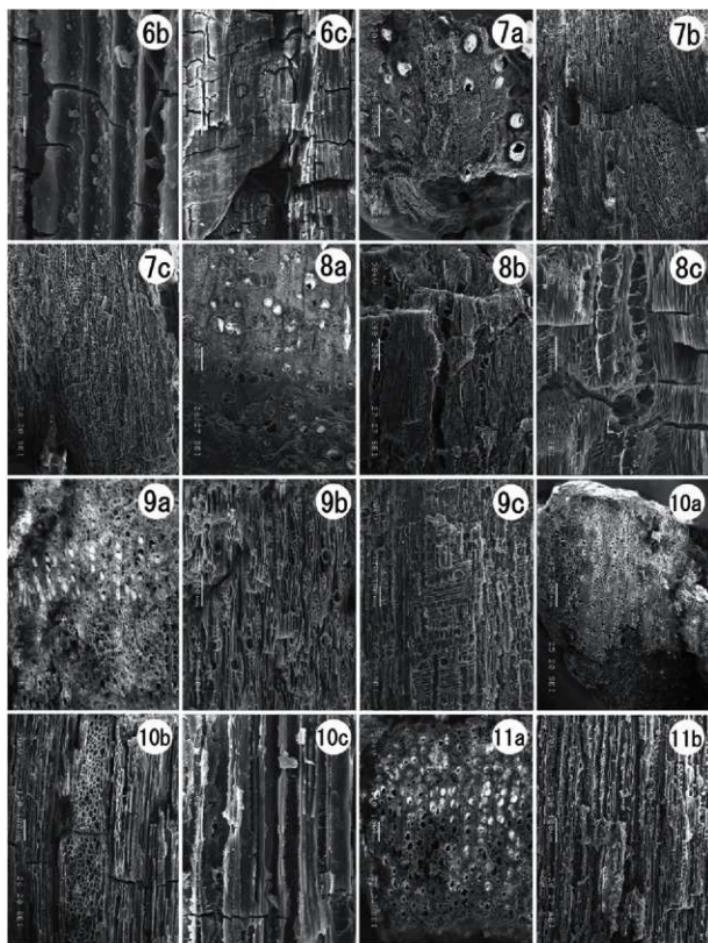
- (4) ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 国版1
4a-4c (試料No.7)
仮道管と放射柔細胞および樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は少ない。分野壁孔はやや小さいヒノキ型～トウヒ型で1分野に1～2個である。
ヒノキ属には、本州の福島県以南・四国・九州の山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育するヒノキと、ヒノキより分布域は狭く東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育するサワラがある。材は耐久性と切削性、割裂性に優れている。
- (5) 針葉樹A Conifer A 国版1 5a-5c (試料No.22)
仮道管と放射柔細胞および樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量が多い。分野壁孔は小さいヒノキ型と思われる。
- (6) 針葉樹B Conifer B 国版1 6a (試料No.21),
国版2 6b-6c (試料No.21)
仮道管と放射柔細胞および樹脂細胞からなる針葉樹材である。その他の組織は不明である。
- (7) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 国版2 7a-7c (試料No.13)
小型～中型の単独道管が放射方向に配列する放射孔材である。接線状の柔組織が頗著である。道管の穿孔は單一である。放射組織は同性で、單列のものと集合放射組織がある。
アカガシ亜属は、暖温帯に分布するアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、ブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弹性や耐湿性があり、農具として用いられる代表樹種である。
- (8) クワ属 *Morus* クワ科 国版2 8a-8c (試料No.6)
年輪の始めに中型の道管が分布し、晩材部では小型の管孔が配列し、軸柔細胞が周囲状組織をなす環孔材である。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿
- 孔は单穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性で1～6細胞幅、4～48細胞高である。
- クワ属は、落葉高木または低木で、温帯から亜热带の山中に広く分布するヤマクワと、和歌山県・中国地方・四国・九州の暖帶の山中にまれにあるケグワなどがある。材は重硬・強韌で心材は特に保存性が高い有用材である。
- (9) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 国版2 9a-9c (試料No.4)
小型の道管が単独または2個程度放射方向に複合する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔である。放射組織は異性で1～3細胞幅、4～10細胞高、大型の結晶をもつ細胞がある。
- ツバキ属にはサザンカヒヤツバキがある。サザンカヒヤツバキは、暖帶の海岸から山中に生育する常緑高木である。ヤツバキは、暖帶の海岸から山中に生育する常緑高木である。材は強くて硬く、建築材や器具に使われる。
- (10) アオキ *Auchuba japonica* Thunb. ミズキ科 国版2 10a-10c (試料No.12)
非常に小型の道管が単独または放射方向に2～数個が複合して散在する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段数の多い階段穿孔、内腔には明瞭ならせん肥厚が見られる。放射組織は異性で9細胞幅、背が弱い。
- アオキは、暖帶から温帯下部の林内に普通に生育する常緑低木である。材は筈、杖、小工具などに使われる。
- (11) 散孔材A Diffuse-porous wood A 国版2 11a-11b (試料No.17)
中型の道管が単独または2個程度放射方向に複合する散孔材である。放射組織は、異性で1～2細胞幅、1～10細胞高であり、端部は直立細胞からなる。穿孔は16本程度の階段状である。

(藤根 久)



図版1 出土炭化木材組織の走査電子顕微鏡写真 (a:横断面, b:接縫断面, c:放射断面)

1a-1c.カヤ (No.16) 2a-2c.マツ属 (No.14) 3a-3c.スギ (No.8)
4a-4c.ヒノキ属 (No.7) 5a-5c.針葉樹 A (No.22) 6a.針葉樹 B (No.21)



図版2 出土炭化木材木材組織の走査電子顕微鏡写真 (a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面)
 6b-6c.針葉樹B (No.21) 7a-7c.コナラ属アカガシ亜属 (No.13) 8a-8c.クワ属 (No.6)
 9a-9c.ツバキ属 (No.4) 10a-10c.アオキ (No.12) 11a-11b.殷孔材A (No.17)

VI 小結

今回、その概要を報告した中川原遺跡2次調査は、大山町域において今までに（旧）大山町教育委員会及び日田市教育委員会が実施した発掘調査の中では、一番規模の大きなものであった。

また、遺跡は旧石器時代から中世にかけての複合遺跡であり、いにしえの大山の人々の歴史の証となる材料を数多く私たちに提供してくれた。

出土遺物の整理作業・各遺構の検討等、未だ作業半ばの状況であるが、以下に、調査によって覗えた注目点や今後の課題等を列挙し、小結びとしたい。

今回の調査で確認された一番古い人間の痕跡は旧石器時代の台形石器である。その石材は良質な黒曜石であり、風化が進んでいる。大山町域での旧石器時代資料の確認は今回の台形石器1点が初めてであるが、石器集中部など当時の人々の行動の痕跡は検出されなかつた。遺跡地の南東側には多くの旧石器時代遺跡がみられる五馬台地が展開する。今後、当該期の人々の行動領域を考える上で参考となろう。

縄文時代のものは、1軒の堅穴住居跡を代表に多くの資料を得ることが出来た。

堅穴住居跡からは、所謂“御手洗八式土器”がまとまって出土し、後期中葉の小池原上層式土器や縄帶文土器などの磨削繩文土器がそれに伴っていた。この住居跡で特筆すべきは、51点もの多くの石錐が出土したことである。また、住居跡の壁の土からは所謂どんぐりやブドウなど当時の食料が多く検出されている。これらの出土遺物は、川沿いに位置する遺跡地に居を構えた当時の人々の生業背景を考える上では良好な材料となろう。あわせて、多く出土した石錐の中には一定量の鋸歯鐵が含まれていた。九州の内陸部に位置する日田市では、やはり川沿いに位置し、縄文時代後期を中心とする大肥祝原遺跡D区⁽¹⁾でも、鋸歯鐵がまとまって出土している。今後、遺跡の立地や発掘調査による各種情報などから、この鋸歯鐵の機能、そして用途へアプローチしていなければと思うところである。

このほか複数の土坑から後期中葉の鋪崎式土器の末期頃から北久根山式土器の初期の資料が得られている。当該期の土器型式の変遷過程を窺う上で参考となろう。

遺物包含層からは、早・前・晩期の資料が出土している。特に前期土器が資料的に多い。近年、日田市においては縄文時代前期の良好な資料の蓄積がみられる。それらとあわせて、今後この中川原遺跡出土の前期土器は、筑後川流域の当該期の人々の生活や行動を探していく良い材料となろう。

この遺跡地において中心となるのは、弥生時代後期から古墳時代初頭の堅穴住居跡群である。130軒以上検出したこの時期の住居跡のほとんどは埋土保存することが出来たため、2軒のみの完掘に留めた。その他の多くの住居跡は、上面検出した際に顔を出している遺物の掘り上げまでで調査を終えた。しかし、その遺物量は多く、私たちに多くの情報を提供してくれる。如何せん、そのほとんどを完掘していないため、正確な様相は掴み難いが、切り合い関係からみて新しい住居跡は、大きさはそれ以前ものよりも小さく、畿内系の雛形土器がみられる。また、その畿内系の土器にいたっても、色調（焼成具合）や器皿の厚さ（器面調整の差か）などから、大きく2種類に分けられる。今後整理作業を進め、在地系の土器をも含めて、その器面調整や胎土等細かく見ていくことにより、当該期のより詳細な社会背景を窺うことが出来よう。

また、堅穴住居跡群の大山川と対岸側には大きな溝が在る。この溝の存在は、大山川とあわせて、あたかも環濠集落の様相を窺わせている。隣接する（旧）塚の本遺跡を調査した後藤宗俊氏は、そこで確認した弥生時代中期の土器を包含する溝遺構のあり方から、環濠集落の存在の可能性を指摘している。⁽²⁾

今回の調査では、中期の堅穴住居跡は把握しておりず、また中期の土器に関して、それと見て取れるもののか破片で数点といった状況であった。溝の

時期にいたっても今回の確認用のトレンチ内部からの出土遺物だけでは、何とも言えない状況である。このため、環濠集落の存在に関しては、その可能性は大いに有るもの、今後の課題のひとつとしておきたい。

今回、大山町域で初めて確認されたものとして古代の遺構が挙げられよう。

明確なものとしては、堅穴住居跡が3軒検出されている。これらは後世の開発によりそのほとんどが削平を受けており、堅穴の深さは深いところで10cm程度、残りが悪いものでは辛うじて床面か把握出来るといった状況で、非常にその残りが悪かった。

時期的には、出土遺物から奈良時代に当たられる。この時期の堅穴住居跡は、遺跡地で数多くみられた弥生時代後期から古墳時代初頭の堅穴住居跡群の存在する場所とは離れて、その北西側の微高地の縁辺部に点在していた。これら古代の堅穴住居跡の残りの悪さから、微高地の中央あたりに存在していた同時期の堅穴住居跡が完全に失われてしまったとも想定されなくも無いが、隣接する弥生時代後期の堅穴住居跡の在り方を考えると、完全に失われてしまうことは、やや考え難い。

のことから、微高地に多くの堅穴住居を構えていた弥生時代後期から古墳時代初頭の時期と、微高地の縁辺部のみに堅穴住居を作っていた奈良時代とでは、土地利用のあり方が大きく異なっていたものと捉えるのが妥当のように思える。

いずれにしても、遺跡地は自然堤防上に位置しており、自然現象や環境の変化によって、その利用の

され方が変わっていくであろうし、その時々の時代による生業背景の変化→社会背景の変化によっても、土地の利用のされ方は変わっていくものであろう。

今回の中川原遺跡2次調査地は、そんな人々の土地との関わり合いの歴史を伝えてくれている。

今後、整理作業を進め、調査成果をまとめていくことにより、この人と土地との歴史を紐解いていくたいと思う。

また、今回の調査では、日田市では初めての試みとして、堅穴住居跡内の³の土を採取→水洗し、その中の炭化物を抽出する作業を行っている。その結果、多くの炭化種や炭化材の出土をみた。^①

炭化種の同定作業からは、当時の食生活を考える上で重要な史料を得ることが出来たし、炭化材の樹種同定からは、炳にくべていたであろう燃料材の利用のあり方が推定されるとともに、当時の遺跡地周辺の植生についての情報も得られた。

今回のこれら自然科学分析は、owie時代後期の堅穴住居跡の³の土を用いたものである。今後、日田地域においても、他時期・他立地での分析試料を増やしていくことに、日田地域に暮らしてきた人々の生活を、より細かくみていくことが出来よう。

【註】

- (1) 今田秀樹編 2006 「大肥祝原遺跡Ⅱ」 日田市教育委員会
- (2) 「琢の本道跡一件 昭和49年9月28日発見 昭和49年10月28日 大山町教育委員会」の記録
後藤宗俊 1995 「第二編 第一章 先史・原史」[大山町誌 虹を追って] 大山町
- (3) 詳細は、本誌「V 自然科学分析」及び「付録2 中川原遺跡の植物遺体からみたowie時代の植物利用」を参照。



発掘作業風景



発掘作業を見学する大山小学校2年生

付録1 縄文住居を掘る

大山川に沿い形成された自然堤防上、その川と反対側に存在が窺われる後背低地への落ち際において、1軒の縄文時代後期中葉の竪穴住居跡が見つかった。

この住居跡が確認された位置は、この遺跡地で数多く検出された弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡が密集している一帯とは異なり、それよりも北西側、舌状に延びている自然堤防の先端（舌部）に近い場所であった。



▲縄文住居の位置（矢印）

◀竪穴住居跡（北から）
一辺5m前後の正方形。深さは残りの良い所で70cm程。主柱穴は4本で、床面中央には石組炉がみられる。



▲石組炉
5枚の平石を花弁状に配し、真ん中には底石が敷かれている。

調査当初、この遺構については住居跡とは判断しておりらず、やや菱形に近い梢円形の土坑として把握していた。

調査時の検出面の土層の色調が明黄土色であるのに対して、検出時から把握していたこの土坑の埋土は褐色であり、当初はその褐色の埋土を掘り下げていった。

そして、この土坑を、底面と思った位置まで掘り下げたところ、がらしきもの認められた。結果的には、それが石組炉であり、この遺構が竪穴住居跡であることを教わることとなつた。

のことから、土坑と思っていたこの遺構の地山（検出面の土層及びその下位にある土層）とそっくりな壁面から底面をよくよく観察すると、わずかではあるが細かな炭化物の粒子が含まれており、こ

の遺構の埋土を掘りきれていないことが確実に判つた。しかし、その埋土と地山を、土質と色調から区別することは頗る困難であった。

さらには、改めてやり直した平面観察においても、褐色の埋土の外側で住居跡のはっきりとしたプランを検出することは出来なかつた。このため、褐色の埋土から外に向かって幅15~20cmの細長いトレチを5本設定し、断面での住居跡の壁の立ち上がりの把握に努めた。しかし、この断面での検出作業においても、埋土と地山の境を区別することは容易には出来なかつた。

以上のような困難な遺構検出・掘削状況を打開するため、褐色を呈する埋土の外側の上面検出と細長いトレチ内の壁での断面検出を同時にしながら、住居跡内の埋土をスライスしながら除去していき、

その壁面・床面の検出を行うこととした。

以下では、この縄文時代後期中葉の竪穴住居跡の発掘過程とその成果を、作業・調査風景などの写真を織り交ぜ、見ていくことしたい。



◀調査風景
この頃は、まだ土坑として発掘中。



◀▲土坑として捉えていた時の埋土の状況
左が北西側から、上が南西側から見た土層。
この時点では、周囲の検出面と同様の土が確認されたところを、壁または底とし削削作業を進めていた。



▲土坑として捉えていた時の埋土の状況（左が北西側、右が南西側のアップ）

この段階での上層は大きく2層に分けられ、
上層は淡褐色、遺構の中央辺りの下位には
褐色の土層が見て取れる。この2層とともに、
ともに遺物や炭化物を多く含んでいた。
当初、底（地山）として捉えていた面は明
黄土色であり、よくよく観察しないと地山
との区別は困難であった。



少しだけ顔を出し始めた石組炉▶
埋土の中には、大小の石が含まれ
ていたため、この時点で遺構の中
央辺りに見られた平石を、炉の石
とは想定していなかった。



炉の上部

平石が見られた牆の土剥離確認用のベルトを除去すると、炭化物等を多く含む範囲が、丸く出てきた。



土塊のサンプリング

炭化物を多く含む土は、丁寧に採取することにした。

この採取した土からは、その後の自然科学分析により、当時の食生活の一端を窺うことが出来ている。(詳細は、本誌V章を参照。)



スライスによる掘り下げ作業

細く長く設定したトレンチと構築周囲の上面検出状況を随時検討しながら、スライスしていく。

スライスのひと括きごとに、その括いた面に炭化物の細かい粒子が含まれているかどうかの確認を行いながら作業を進めていく。



姿を現した石組群

この時点では石組だけが発掘り状態であり、床や壁はまだはっきりとはしていない。



▲トレンチの壁を見る

写真的右上から左下に斜めに引いた線が住居跡の壁のライン。その右側が地山、左側が住居跡の埋土。地山と埋土の土の差は微妙で、非常に判り辛い。

この土の差を、トレンチの壁面にてこのくらいはっきり分けられた場所は他に無かつた。



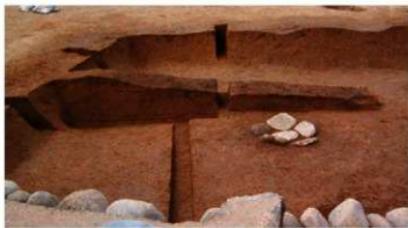
▲トレンチから現れる地山と埋土の差



スライスで

床を探す▶

底面にも2箇所のトレンチを設定し、床面の把握に努めた。



壁と床を把観

平面プランを確認するための上面検出と細長いトレンチの壁による断面検出とを随時行いながらのスライス調査により、綺麗で立派な方形の堅穴住居跡が姿を現した。



石組炉（西側上から）



住居跡掘り上がる（南西側より）

スライス調査により掘り上がった住居跡。
一辺を欠くものの、柱位置からの想定で、
一辺5mほどの正方形の堅穴住居である
ことが判った。



▲残された土層からの情報（南西側）

左と上（土坑として掘っていた段階）の写真を見るとおり、初めに土坑としての認識だった頃の褐色の埋土は、地川の明黄土色～淡黄土色の土がレンズ状堆積した後に、何らかの要因で埋まっていたものと考えられる。

なお、このレンズ状堆積した土と地山の土は、炭化物の細かい粒子の有無以外の差はほとんど無いため、発掘にあたっては、それこそ地面にへばり付いてのスライス調査にて観察しながら掘る方法しかなかった。



炉の焚口か（東南側から）

花弁状に並べられた5枚の平石のうち東南側の一枚のみが寝かせた状態で掘えていた。

◀炉の焚口に腰を下ろす…

がの右手の人物の位置が東南側。
この人の足元の床面のみ、他と違い硬化していた。一番硬化していた範囲は炉に向かって長さ25cm、幅55cmほどであった。
縄文人は、ここに腰を下ろし炉に薪をくべていたのであろうか。



何人家族？

縄文時代後期中葉、当時は何人の人がこの家で暮らしていたのでしょうか…。

付録2 中川原遺跡の植物遺体から みた縄文時代の植物利用

佐々木 由香（バレオ・ラボ）

九州地方で縄文時代に人間が利用し、出土例が多い種実は何か、といえばドングリ類であろう。ドングリ類の中でも食用にあたってアク抜きを必要としない落葉樹のイチガシの出土例が遺跡数の上でも出土量も多い。しかし、最近の低湿地遺跡の調査の結果、イチガシが量的には多いものの、アク抜きが必要である落葉樹のクスギやナラガシワなども縄文時代早期末葉から利用されたことが明らかとなってきた。たとえば、佐賀県佐賀市の東名遺跡では縄文時代の早期末葉（約7,000年前）の貝屑や貯蔵穴から大量のイチガシに混じってクスギやナラガシワが出土した（佐々木・山田, 2009）。縄文時代の早い段階で、複数種のドングリ類を利用する技術が確立していたことがわかる。ドングリ類は比較的大型の種実であるために、発掘調査時に発見されやすい。特に低湿地遺跡のような水漬けの環境では生の果実が良好な状態で出土するため、種レベルでの解析が可能である。

中川原遺跡は、日田盆地の南に広がる山間部の、大山川左岸の自然堤防である微高地上に立地する。こうした場所では、果実はバクテリアなどによって土の中で分解されてしまい残存しない。しかし、調理時や加工時、また住居跡の焼失時などに偶発的に炭化して無機物になった果実や子葉が出土する場合がある。縄文時代後期中葉の堅穴住居跡である3号土坑の炉内からは、炉内の土壤を水洗した結果、コナラ属のドングリ類の子葉が出土した（炭化種実同定の項参照）。残存状況が悪く、形状からクヌギ節（クスギ・アベマキ）以外のドングリ類と考えられるが、種類は不明であった。

ドングリ類は果皮を剥いて内部の子葉を取り出し、食用とする。わざわざ炭化させるための加工はしないと考えられるので、大多数は食用にされ、偶発的に炭化してしまったものの多く炉内に残っている

と考えられる。ドングリ類が炭化した後も、炉は繰り返し使用されていたと考えられ、そうした人間の行動の結果、炭化種実の残存数は少なく、残存状況も悪かったと考えられる。

中川原遺跡では、縄文時代だけでなく弥生時代後期終末と古墳時代初頭の堅穴住居跡からもドングリ類が出土している。特に古墳時代初頭の69号住の埋土上部からは大多数がイチガシと思われるコナラ属アカガシ亜属Bの炭化子葉がまとまって出土した。縄文時代以降もドングリ類の利用が引き続き行われていたことが確認できる。なお、この住居のドングリ類は果実の破片が多数伴うことから、本来はこの住居内の棚上や他の場所で果実のまま貯蔵されていたものが、何らかの要因で炭化し、廃棄または遺棄されたことが考えられた。そのため保存状態は縄文時代後期の炉出土のものより良好で、量的にも多く、亜属レベルの同定が可能であった。こうした縄文時代以降のコナラ属の利用例は中川原遺跡だけでなく、日田市内では葛原遺跡6次調査で検出された弥生時代中期初頭の1号堅穴住居跡でも確認されている（佐々木・パンダリ、印刷中）。葛原遺跡ではイネやアワといった栽培植物も見いだされていることから、穀類の栽培に加えてドングリ類が利用されていたことがわかる。中川原遺跡では、縄文時代に栽培植物は利用されたのであろうか。炭化種実ではイネの可能性があるイネ果実破片が1点だけ出土した。一般に遺跡周辺の植生や栽培植物の解析には種実のほか、花粉分析が使われることがあるが、中川原遺跡のような微高地上では花粉も生の種実と同様、バクテリアにより分解してしまうので、分析はできない。しかし、イネ科など特有の植物が特有植物珪酸体（プラント・オパール）はガラス質のため、乾燥した陸生の土壤でも良く残る。3号土坑の炉内の土壤を用いてプラント・オパール分析を実施したところ、3号土坑内からはイネの葉や茎に形成されるプラント・オパールが少量検出された（植物珪酸体分析の項参照）。最近、土器中の種実の圧痕を同定することにより、縄文時代のイネなどの栽培植物

利用が明らかになっているか（山崎、2008）、縄文時代後期中葉の確実なイネは見つかっていない。中川原遺跡においても帰属時期が問題となろう。炉が検出された面は遺構確認面下約70cmであるが、遺跡の立地が明治期から現在まで水田であることや、プラント・オバールの検出量が少ないと、焚きつけ材や燃料の灰であれば確認できるイネの单細胞や長細胞が確認できることを考えあわせると、後世からの混入の可能性がある。

そのほかの縄文時代の利用の可能性がある種実として、カラスサンショウ種子がある。カラスサンショウは伐採跡などの裸地にいち早く伸びて葉を広げるバイオニア植物である（写真）。遺跡周辺の明るい場所に生育していたことが推定される。炭化種実同定の項で述べたように近現代では種子の利用は知られていないが、最近縄文時代の後晩期の遺跡からまとめて出土する例があり、中川原遺跡からも炉内に炭化して一定量がでていることを考えると、香辛料や薬用として利用された可能性がある。

そのほか、利用の可能性がある種実として、マメ科種子がある。最近、マメ科のうち、ダイズ属とササゲ属が樹で識別できることが分かり（小畠ほか、2007）、九州地方では現生のダイズと比較すると栽培種に匹敵するダイズが縄文時代後期以降にみられることが明らかになった。中川原遺跡出土のマメ科



▲現生のカラスサンショウ種子

（スケールは1mm）

種子は保存状態が悪く識別点が残存していないが、形状はササゲ属（栽培種のアズキや野生種のヤブツルアズキなどを含む）に似ている。長さ4.0mm、幅2.5mmであるため、大きさは野生種に近いが、炉内に炭化して出土したという出土状況や他に産出した種実で属以下に同定した種実はすべて利用できる植物であることから、このマメ科種子についても利用した可能性が高い。

このように中川原遺跡の縄文時代後期中葉の堅穴住居のなかにはドングリ類、カラスサンショウ、マメ類、イネ？という樹木起源の種実と草本起源の種実双方の利用が推定された。こうした種実を利用するために、集落周辺にどの程度の人为的な開拓が加わった植生が広がっていたのか、またマメ類やカラスサンショウを利用する地域性があるのかについては、今後の試料の蓄積を待って検討したい。



▲現在のカラスサンショウの樹木（左）と果実部分（右）（写真：（左）森林総合研究所提供）

【引用文献】

小畠弘己・佐々木由香・仙波靖子（2007）土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培。植生史研究15(2), 97-114.

佐々木由香・山田広幸（2009）出土堅果類の破碎痕および形状の検討。佐賀市教育委員会編「東名遺跡群」第6分冊。佐賀市教育委員会。

山崎純男（2008）土器圧痕にみる栽培植物。小杉康他「縄文時代の考古学3 大地と森の中で—縄文時代の古生態系—」, 169-179. 同成社。

あとがき

平成17年3月22日に、日田郡大山村は同じく日田郡の天瀬町・前津江村・中津江村・上津江村とともに、日田市に編入合併した。

それ以前、天瀬町の文化財担当者として埋蔵文化財の発掘調査に携わっていた私にとって、中川原遺跡2次調査地での発掘調査は、合併後担当した遺跡としては2遺跡目であった。

10年以上天瀬町の五馬台地で発掘調査をし、そこでクロボクや黄色ローム、黒色帯といった土に慣れていった私にとって、中川原遺跡のような河川沿いの砂質土壌での発掘調査は難しく、毎日かかめ算であり、失敗もまま有った。

そんな中で、「付録1」で紹介した繩文時代の堅穴住居跡の確認は、大きな出来事であったと言える。そこでも述べていたように、この遺構は、初めに地山と思っていた位置まで調査を終えていたら、ただの大きな土坑でしかなかった。しかし、よくよく見ると地山と思っていたところが、まだまだ堅穴住居跡の埋土の一端であり、それを上手く把握することで綺麗な堅穴住居跡が現れたのである。



発掘調査に参加した方々（平成17年度）



発掘調査に参加した方々（平成18年度）



▲発掘作業風景

この堅穴住居跡の発掘調査は、私には非常に難しく、根気の要る作業であった。この難しい作業を進めることが出来たのは、偏に同僚の渡邊隆行氏と若杉重太氏との意見交換によるところが非常に大きい。また、最後にあの綺麗な方形の住居跡を見ることが出来たのは作業員さんらの細かい作業と若杉氏のご助力によるところが大きい。まずは、この場にて感謝したい。

調査が終わって3年が経つものの、その資料は未だ完全に整理しきれておらず、今回は概報という形で、遺跡の内容を十分に吟味しきれないままの報告となつた。近い将来、十分な整理・調査・検討を踏まえた正式報告書を出すことを誓いつつ、この中川原遺跡2次調査に参加された多くの発掘作業員さん、細かい注文の多かった整理作業を続けて頂いた整理作業員さん、発掘調査中に現地に来て頂き、有益なご助言・ご教授を頂いた方々、整理作業中にご教授を頂いた方々などに感謝の意を述べたい。

最後に、今回急なお願いにもかかわらず、忙しい中、快く原稿の依頼を受けて頂きました佐々木由香氏に心よりお礼申し上げます。

報告書抄録

ふりがな	なかがわいせき							
書名	中川原遺跡							
副書名	2次調査の概要							
卷次								
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	93							
著者名	今田 秀樹・若杉 竜太・佐々木 由香							
編集機関	日田市教育府文化財保護課							
所在地	〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1							
発行機関	日田市教育委員会							
所在地	〒877-8601 日田市島田2-6-1							
発行年月日	2010年3月24日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 道路番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
中川原遺跡	大分県日田市 大山町西大山 字 大ヶ	44204-6	204294	33° 15' 35"	130° 57' 49"	20060313 ↓	6,160m ²	柵場整備
						20060329		
						20060524 ↓		
						20061110		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中川原遺跡	集落	縄文 弥生 古墳 古代	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 溝 土坑 遺物包含層	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 石器	·140軒ほどの堅穴住居跡を確認、そのほとんどは弥生時代後期～古墳時代初期もとのみられる。 縄文時代の堅穴住居跡(「住跡」)と軒道跡(「走跡」)がA式土器と階級縄文土器がまとまって出土。また、こから51点もの石器が出土している。 縄文時代の堅穴住居跡や土器などから出土した石器の中に、鐵製鍬が一定量みられる。			
					要約	中川原遺跡2次調査地は、大山川左岸の標高約130m前後の微高地に位置している。遺跡の存在する微高地は、大山川川辺に形成されたむわる自然堤防とみられ、川の下流方面に舌状に延び、川との反対側は後背低地となるのが認められる。 今回の調査では、この自然堤防上において、旧石器時代から中世にかけての人々の痕跡が確認された。 なかでも弥生時代後期から古墳時代初期とみられる堅穴住居跡は130軒以上を数え、今回の調査地の中心的な存在といえる。また、後背低地間に存在する溝は大山川とともに、これら堅穴住居跡を取り囲むような位置にあり、隣接集落とも想像させられる。 自然堤防の縁辺部にて検出された縄文時代の堅穴住居跡は、一部を欠くものの、その残りは非常によく、土器や石器などの出土遺物はもとより自然科学分析結果などからも、当時の生業背景を窺うことの出来る良好な資料が得られている。 今後、整理作業等を進めていくことにより、大山町域におけるこの遺跡のあり方、周辺地域を含めた中のでの当遺跡の位置付けがより詳細に見えてくるものと思われる。		

中川原遺跡

—2次調査の概要—

2010年3月24日

編集 日田市教育府 文化財保護課
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1
発行 日田市教育委員会
〒877-8601 大分県日田市島田2-6-1
印刷 (有)中央印刷
〒877-0012 大分県日田市淡窓2-3-1